
夢よ現実に

嵯峨野斎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢よ現実にな

【Nコード】

N4786V

【作者名】

嵯峨野斎

【あらすじ】

進堂歩夢、14歳。母親に似た美貌のせいで「学校一の美女」だとか「告られ率？1（男からの）」だとか……。鬱陶しすぎるんだよ！ 僕は男だっつーの！！

ストレスを発散するために逃げ込むのはいつも夢の中。夢の中ならなんでも僕の思う通りにできるから。空を飛ばうが水の上を歩こうがなんでもこいだ。それが僕の力である。

でも最近、少し違和感を感じる事がある。まるで現実でも力が行使できるような……？

注：男から告られたりBLっぽい表現が出てくるかもしれませんが、BLではありません。主人公はノーマルです。一応コメディィで・・。

プロローグ（前書き）

初投稿です。稚拙ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

初めまして、僕は進堂歩夢^{しんどうあゆむ}。十四歳、花の中学二年生さ！

・・・なんて初っ端からテンション高め^{たかめ}に自己紹介をしてみたけども。ぶっちゃけ普段からこんなにテンション高くないからね？
いつもはもっとクール！・・・なはず。

まあ高過ぎて引かれるとアレなんで、ネコでもかぶつときましようかね。ヨイシヨ。

で、自己紹介の続き^{つづき}はんだけど、僕には秘密がある事を伝えておこう。「は？ 何それ？」って思ったアナタ！ 変人を見るような目は止めてください、大変傷つきますから！

・・・え〜と、あーそうそう、秘密だったね。それは僕が『夢の中ならスーパーマンになれる』って事なんだ。・・・ああ！ 待つて、帰らないで僕の話最後まで聞いて〜！！

はあ、はあ・・・そうだよ、いきなりこんな事言われてもワケ分かんないよね。なるべく分かりやすく説明するけど・・・僕説明するのって苦手なんだよなあ。だから分からなかったら遠慮なく質問してくれていいからね。

えっと、みんなはさ、夜ご飯食べてお風呂入って、歯磨きして寝たら夢を見るよね？ 僕が言っているのはその夢の事^{こと}んだけど・・・。

え？ 夜ご飯食べて〜のくだりはいらなくて？ そこはホラ、

ノリだよノリ。詳しく説明しないと分からないっていう人もいるかもしれないし。夢を見ない人もいるって？ まあ、それは人それぞれだし……。ってか覚えてないだけで夢を見てるハズなんだケドなあ……。レム睡眠って言って

ハッ！ これじゃあ話が進まない！

とにかく僕は夢を見るワケなんだよ。んで夢の中って大抵自分の思い通りにならない事が多いよね。楽しい夢を見たいと思っても悲しい夢になったり、あーしたいこーしたいと考えててもその通りにならなかつたり……。でも僕は思い通りにできるんだ。つまり夢の中では無敵なのだ！

え？ 精神科？ 何で僕がそんなところに行かなきゃならないんだよ？ もうそれは病気じゃないかって？ 失礼な！僕は全くの健康体だよ！

は？ 現実を見るって？ そんなの言われなくてもがつつり見てるよ！ なたたつて夢の世界に飛び込みたいくらい辛い現実が待ってるんだから！

あ……。このまま目が覚めなきゃいいのに……。なんて考えたのはもう何回目だろう……。いや、何十回目か？ いやいや、何百回目か……？

ハッ！ 何その『一球闘魂』って書かれたハリセン！？ 意味分かんないよ！？

いや、そんな力強く振りかぶらなくても……。！ ってか風切る音凄くない！？

いやあああああ……！

ドーンー！

耳に入ってきたのはスパーンって音じゃなく。同時に額に激痛が走ったのもうそれを気にするどころではなく、しばらく頭を押さえながら悶絶するはめになった。

ようやくの思いで顔を上げると、そこは僕の部屋のベッドの下。何故ベッドの下かと言うと、そこから落ちたからである。額から落ちたもんだから、フローリング仕様の床に打ちつけた痛みはハンパじゃなく痛いワケで……。ま、おかげで目がバツチリ覚めたんだけどね……。

それにしても変な夢見たなあ。軽く自己紹介しただけなのにハリセンが……。一応夢の中じゃ僕の思い通りにできるハズなんだけどなあ。

一昨日なんて襲いかかってくる悪漢どもをちぎっては投げ、ちぎっては投げ……。まあ、寝る前にしていたゲームの影響でそんな事になったんだケド。

その前はモンスターだったな。襲われそうになっていた姫を助ける勇者みたいな感じ？ 剣でバツサバツサと切り捨てていく……。

後は愛と勇気が友達とかいう某国民的アニメキャラクターのよう
うに空を飛んでパンチを繰り返したり……。

そんな夢の追走をしていたら、目覚まし用の時計が目に入って。

「やばっ！ 遅刻する！」

僕は慌てて着替えると、ドタバタと騒がしい音を立てながら階段を下りていった。

「おはよう、歩夢。今日は騒がしいわねえ」

のんびり話しかけてきたのは母さんだ。進堂美鈴しんどうみすず三十四歳、趣味は料理の専業主婦。名前にある『美』の通り、かなり美人なんだ。近所でも結構評判で、僕の秘かな自慢である。でものんびりし過ぎているところが長所と言うか短所と言うか……。

僕が寝起きに凄いい音を立てても、遅刻しそうになってもものほほんとしてるんだもんねえ。

「おはよ、母さん。父さんはもう仕事？」

「ええ。先に出かけたわよ。あなたの顔が見れなくて残念そうだったわねえ」

クスクスと口元に手を当てて笑う姿はとても上品だ。なにせ母さんは資産家のお嬢様だったのだから、動きに品があるのはまあいつもの事だ。だった、と過去形なのは、親に結婚を反対されて、父さんと駆け落ちしたというありふれた展開ながらもなかなかロマンティックな過去をお持ちだからである。

今年四十歳になる父、進堂しんどう巖はその名のように頑固で偏屈、良く言えば一途で、母さんを一目見た時から惚れこんで猛アタックしたらしい。見事母さんのハートを射止めたのは良いが、その親族から猛反対され、仕事まで追われて大変な目にあつたという。

今でも母さんの実家とは絶縁状態で、僕は母方の祖父母の顔すら知らない。

十年以上経つても新婚夫婦並みに仲の良い二人だ。まあ、僕もそれを自慢に思っているのだが。

ただ、父さんは母さんの綺麗な顔にベタ惚れで。おまけに母さんに似た僕にもベタ惚れで。つまり、近所でも有名な子煩悩なのである……。

(もし僕の顔が父さんに似てたら、今頃放任主義になつたのではなからうか……)

そう思つ事は一度や二度ではない。

とにかく。遅刻しそうだった僕は、母さんが用意してくれた牛乳を一息に飲み、サンドイッチ(中身はたまご)を頬張つて玄関へ駆け出した。

「喉に詰めないようにね。いってらっしゃい」

そんな母の声を背中に、鞆を背負つて慌ただしく外へ出た。

ブローグ（後書き）

誤字、脱字、感想などございましたら、是非！！

8 / 5 行間を修正しました

ヒロインと変人と・・・(前書き)

おもしろく、おもしろく、と念じながら書いてます(笑)

ヒロインと変人と・・・

学校は歩いて十五分ほど。いつもならのんびり歩いて向かうところだが、今日は時間がないので自転車に乗っていく。立ちこぎで必死にこいでいると、学校に着くのはあつという間だ。

校門を抜けて自転車を駐輪場に置き、自分の教室に駆け込んだところでチャイムが鳴った。

「セーフ・・・」

フウ、と大きく溜息を吐いていると、クスクスと笑い声が聞こえてきた。顔を上げると、そこにはクラス一美少女な麗華れいかちゃんが・・・。

そう、彼女、鈴原麗華すずはらちゃんはとっても可愛いのだ！ クラスどころか学校一可愛いと言っても過言ではない。そんな子と同じクラスってというのはホント幸せ者だよねえ。もう一生分の幸運を使い切った気がするよ・・・。

夢の中でお姫様役なのもほとんどが彼女だったりする（本人には口が裂けても言えないケド）・・・んな情報どうでもいいか。

鈴が鳴るような澄んだ声で笑う彼女に見惚れていると、彼女は目尻に滲んだ涙を拭いながら挨拶してくれた。

「おはよう、歩夢君」

「あ、お、おはよう・・・」

「歩夢君が遅刻しそうになるなんて珍しいね。寝坊したんでしょ？」

「へ？　なんで・・・？」

実際はただ夢を思い出し過ぎて時間がなくなったワケなんだが、そんな事を言えばバカにされるだろうしな。

「寝癖、ついてるよ」

そう言って笑った理由を教えてくれた。っというか、そんなに酷い寝癖なのか？　自分じゃ分からないんだが。

すると麗華ちゃんが自分の櫛とスプレーを持ってきて、僕の腕を引っ張った。ストンと促された椅子に座ると、僕の寝癖を直してくれる。

「綺麗な髪がぐちゃぐちゃだね」

いや、あなたの方が綺麗だと思いますが。

心臓バクバクしております！　腕に触られただけで顔が真っ赤な事請け合いです！

いや、まあ・・・僕も男の子ですからネ？　いくら学校で告られ率？一、二を麗華ちゃんと競ってる僕でも（大っ変っ、不本意なんです！）近くにいたり少し触れるだけでもドキドキするのは当たり前なんですネ？　彼女が僕の事を男として見ていないのが問題なんじゃないかと・・・。

告られ率？一、二とか言いましたが、別に女の子にもてるワケではないデスヨ？　もし相手が女の子なら夢の中の住人になりたくなるほど嫌がる事はないのに・・・何故か相手は男なんだよ・・・。

そーです。男である僕に男が「好きだ」って告白してくるんだよ。
・・・ありえなくね？

見た目は・・・まあ母さんに似てるから、女の子顔負けの美人顔
(父さん談)らしいし、ちよつとは仕方ねえな〜って思・・・いた
いけど思えるかあ！ 僕はノーマルだつづの！ だから麗華ちゃん
んが僕を男として見てないつてのがどんだけ辛い事か・・・！！・・・
・泣いていいですか？

などと内心で号泣していた僕の髪を整え終えた麗華ちゃんがニッ
コリ笑う。・・・かわええ。

「はい、終わり。ちょうど先生来たから、席戻るね」

「あ、ありがとう」

彼女に見惚れていたせいで少し上擦った声になってしまった・・・
。

少々落ち込み気味に席に向かうと(ちなみに僕の席は窓側の一番
後ろ。視力が良いから)隣の席に座る親友(僕は腐れ縁だと思っ
ている)がニヤニヤと笑いながら声をかけてきた。

「おはよ。眼福だったなあ。学校一の美女二人が並ぶと」

「・・・僕は美女じゃないし学校一なのに二人つてのは表現おかし
いだろ」

あ、棒読みになってしまった。

「ズボンはいてても女の子にしか見えない奴が何言ってる」

「・・・それはあれか、暗にスカートはけとでも言っていてやがるのか、オイ」

「それ以外の何がある！」

いや、そんな堂々と宣言されても・・・。いつその事裸になつてやろうか？ 男のシンボル見せつけてやろうかあ！？（お下品です）

・・・駄目だ、むしろ喜びそうだ。特にこの腐れ縁をぶった切りたいほどアホ発言かます友人・・・変人でいいや、その変人。何でこんな奴と毎回同じクラスになるんだ・・・。

そう。何故か小学校からずっと同じクラスなのだ。一クラスというわけでもなく、名前だつて近くもない。・・・ああ、忘れてたけど、こいつの名前は渡部篤郎^{わたへあつろう}。小学校入学式の際に、どの保護者よりも綺麗だった母さん（身内鼻屑ではない）に真つ先に声をかけ、友達が出来ると喜んだ母さんに息子をよろしくとお願いさせた猛者^{もて}（？）だ。・・・まあ僕が女の子だと思っていた奴は少々落胆していたようだったが（ザマーミロ）。

担任の先生が出欠確認と注意事項を話している間、僕は篤郎とボソボソと先程の会話を繰り返して聞いていたのだが、先生が教室を出てしまつと騒がしくなる周りの声に掻き消されないよう声のトーンを上げる。

「それより美鈴さん、今日も綺麗だったか？」

篤郎の言葉に、僕は呆れた視線を向ける。

「母さんは父さんとラブラブ（死語！？）だから入り込む余地はないと言つとるだろうが」

「別に入り込むつもりはないと何度も言っとなる。俺にとって美鈴さんはアイドルなんだよ！ 結婚してようが子持ちだろうが関係なく愛せる！ それが俺！」

呆れ果てて何も言えない僕。

篤郎は更に母さんの美点と言うか長所を挙げ始める。いつもの事なので、僕は聞いているフリをしながら右から左へと聞き流し、授業の準備を始めるのだった。・・・いい加減飽きないのか・・・。

理科、社会と終わって次は体育の授業。体操服に着替えてグラウンドへ。なのだが、僕はこの時間がいつも憂鬱です・・・。だつて着替える時に視線が集中するんだもん。おもに男子！

男女別の部屋で、女子の生着替え見たいからって僕を見るのは間違ってる！ 誰が何と言おうと間違ってる！ 例え、おかげで助かっている女子から感謝されてても！

だから僕はカッターの下にTシャツを着る事になっている。夏は暑いけど仕方がない。僕の肌を誰が見せてやるもんか！・・・泣きたいです。

下に着ていたTシャツに落胆の溜息を吐く面々。それで少しは溜飲が下がるというものだ。ってかこの学校、男女半々の人数なんだから男の僕じゃなくて女の子見ろや！

ああ・・・夏になったらプール・・・考えるのが怖い・・・。

などと考えながら変人（もうこれ愛称で良いよね？）と共にグラウンドへ。

体操服から延びる足に視線が集まっているのをウンザリしながら、ストレッチ。

今日は持久走で、二人一組になって一kmの距離を代わり番こに走るもの。一人が走るともう一人は時間や距離を伝えるのだ。

僕は他の男子から組もうと誘われる前に変人を誘う。・・・何か言葉にすると違和感バリバリだな・・・。

じゃんけんで負けた僕が先に走る事に。

別に運動は嫌いじゃないし、身体を動かすのは気持ちが良い。ただ男どもの視線が鬱陶しいだけで。ってかこの場には麗華ちゃんや他の女子がいるだろ！いつまで見てやがる！あ、言葉が乱暴になっちゃった。まあいいや。メンドーだしブリっ子（？）やめよう。

先生のスタートの合図で走り始める第一走者達。僕はその中に混じって自分のペースで走っていた。時折不埒な手が伸びてくるが全部叩き落とす。もうこれ慣れたな・・・。

一kmも走るとなれば息は切れ切れになるし、顔も赤くなる。集中する視線に熱がこもっている気がして（気のせいじゃねえな）顔を隠したいのだが、如何せんこの状態では無理だな。諦めて残り少なくなつた距離を一気に走ろうと考えていたら。

「おっと」

隣で走っていたクラスメイト（男子な）が躓いて転んだ。何と、僕を巻き添えにして。

「うわ！」

抱き付かれるような体勢で転んだので、仰向けになった僕の上に男子生徒が。・・・近いなオイ。

なんか女子の黄色い悲鳴が聞こえた気がするが気のせいだ。うん、気のせいをお願いします。

「悪いな。怪我ないか？」

そいつは申し訳なさそうな顔で起き上がると、手を差し出してきた。行動だけ見たら紳士的だが、明らかにワザと転んでいる。証拠に他の男子がそいつをジロリと睨んで・・・あ、リンチにあった。

僕はもうスッパリその光景を無視して立ち上がる。服についた土を払ってゴール目指して走り出す。ってかあいつのせいで時間ロスしまくったぞ。どーしてくれる。

イライラしながら全力で走る。

もうホントついてねえよな・・・。いつそ空飛んでった方が障害（物にあらず）に邪魔されず早く行けそうだぜ・・・。

そんな事を考えながらつい溜息を吐くと。

「えっ？」

突然身体が軽くなった気がした。つんのめるように倒れそうになり、慌てて踏ん張る。

(何だ、今の・・・?)

だが今はもう何ともない。気のせいか。今日はやたらと風がきついしな、うん。

やっとの事で一kmを走り切ると、汗を拭き拭き変人のところへ戻る。第一走者全員が走り終るまで待たなきゃいけないしな。って言っても遅れてるのはさっきリンチしてた側とされた側だけなんだけど。

「次、変人の番な」

あ、思わず声に出しちゃったよ。名前で呼ぶつもりだったんだけどなあ。

「お。お前より速く走るから美鈴さんに報告よろしく」

スルーですか、そうですか。ってか報告って何だ。自分でしろよ。

そついうと、変人は

「今日は用事があったな。愛しの美鈴さんに会いに行けないんだ。本当に、ホント〜に残念なんだが、お前を伝令役に処す」

「うん、嫌。全身全霊で断る。ってか一生僕ん家に来んな。そして息するな」

息継ぎを入れず一息に。心を込めて心情を言葉にする。これコツね。

「ちよつ、最後酷くね!? 顔が美鈴さんに似ているだけに殺傷力ハンパないよ!?」

うん、意味が分からん。そしてお前は母さんの下僕志願者決定。

「ほら変人、次第二走者の番だ。頑張れ変人、そしてあのフェンスを乗り越えて行け、変人」

「棒読み!? ってかフェンス乗り越えたら川だから! 普通に無事じゃ済まないから! つつか人権どこ行った!? ああ、もう突込みどころ満載だなあオイ!」

当たり前だ、お前ごときが人権語るな、ってか早く行け、フェンスをぶち破る事を期待する。

声に出したワケじゃないが、目がそう語っているように見えたらしく(本心だし)変人はスゴスゴと歩いていった。母さん似のこの顔、たまには役に立つな。絶対慰めてやらないからな。

良い笑顔で見送っていると、トントンと肩を叩かれたので後ろを振り返る。するとそこにいたのはクラスメイトの・・・誰だっけ。名前知らん。二年になってクラス替えしてからそう間が経ってないから、まだ知らない奴いるんだよな。あ、そーいえばさっき僕に倒れかかってきた奴の名前も知らないや。

「何?」

とりあえず目の前の男子生徒に向き直る。僕より身長が高い。見上げる形になって、なんかムカつく。

すると彼は頬を少し赤くして手紙らしきものを差し出してきた。

まさか・・・ラブレターとか言わないよな？

「あ・・・兄の友達からって・・・」
「・・・は？」

つい間抜けな声が出ちまったぜ・・・。だって目の前の奴すら知らないのに、その兄どころかその友達って・・・ないわー。

面倒臭い、って心情がありありと表情に出ていたため（つか出した）、相手はアタフタしながら説明してきた。

「朝、靴箱に手紙入れたけど、ゴミ箱に直行しちゃったらしくて・・・」

・・・どうでもいいが、それ説明になつたらん。

詳しく聞くとところによると、彼の兄の友達（メンドクサイから兄友な）は僕に一目惚れしたらしく、古風にも靴箱にラブレターを入れたらしい（果たし状の方がどんだけマシか・・・）。

んで僕がそれを読むところを見ようと思って隠れていたが、僕がなかなか来なくて。おまけに他の奴（くだいようだけど男な）が同じようにラブレターを入れようとして、既に入っていたその手紙をゴミ箱に汚物よろしくポイしちゃったと。

男が行った後、兄友は靴箱の手紙をやはり汚物よろしくポイして、自分の手紙を拾おうとして・・・僕が凄い勢いでやってきたワケだ。

結局手紙を渡せず、非常に悲しい思いをした兄友。それを聞いて協力を申し出た兄がちょうどクラスメイトである弟に伝書鳩を頼んだと。

何とまあ友達思いな・・・ってかわざわざ体育の授業にまで持ってくるってのが凄いな。まあ昼休みまでに渡すよう言われているらしいから、焦ってたんだろっな。

靴箱で手に入れたモンなら躊躇いなくゴミ箱行きだったが、こうやって人から渡されると捨てづらいなあ。ってか普通は本人が持つてくるもんじゃねえのか？ 恥ずかしいとかが理由だったらぶつちしてえ。受け取る側だって恥ずかしいんだよ！

そろそろ周りの視線が煩いし、僕は仕方なく手紙を受け取った。傍から見たら弟からラブレター貰ってるみたいだな。顔赤くしてるし。

弟は手紙を受け取ってもらえた事にホッとしたのか安堵の表情を浮かべると、本来の役目を果たしに行った（第二走者に時間伝える役な）。

僕は周りの視線を気にせず、手紙を読む。一応隠すように読んだから多少のプライバシーは守られているはずだ、ウン。

そこには『好きです』やら『昼休みに屋上で』やら『待ってます』などと、まあ簡単に言えば非常にラブレターらしい事が書いてあった。他にもつらつら書かれてたが、まるっと無視。無造作にポケッ

トに突っ込むと、僕も本来の役目を果たしに・・・あ、もう終わってたわ。

変人の恨めしげな視線を尻目に、校舎へ戻っていく僕なのだった
(スルースルーと)。

ヒロインと変人と・・・(後書き)

8 / 5 行間を修正しました

告白とすき焼きと・・・(前書き)

サブタイトル、思いつきません(笑)

ほぼテキストー感満載でございますね、フッフ

タイトルからして速攻の思い付きですから

・・・すいません

告白とすき焼きと・・・

昼休み。

体育の件で恨み言をブツブツ言っているお隣さんが煩くて、仕方なくジュースを奢ってやった。「昼飯奢れ！」なんて叫んでいたが母さんに言いつけてやる、と脅したら大人しくなった。

弁当派ではない僕達は勿論食堂に向かう。

ん？ ラブレター？ 昼休みの最初、などと書かれてあったワケではないし、いつ行ってもいいだろ。だからゆっくり昼ご飯を食べべから向かう事にするのだ。腹が減っては何とやら、だ。

まあ、行かないという選択肢もあったんだが、なんか後々メンディーな事になりそうなので、スッパリお断りしとこう。

と、いうワケで屋上。僕は兄友と対峙していた。

僕より一つ上の中学三年生、のハズだが・・・見えないって・・・

どんだけ高いんだっ、て叫びたいほどの身長に、ガツチリしたがたい。顔は・・・まあハンサムの部類には入ると思う。

・・・僕にとっては羨ましい限りだよ・・・。

軽くたそがれていると、顔を真っ赤にした兄友が上擦った声で

「一目見た時から好きだった。俺と付き合ってくれ！」

そう言つとガバツと頭を下げてきた。スゲー、頭下げたやつと僕と同じ目線……。さすが大男。

……さて、そろそろ避けていた話題を暴露しようか。みんなももう気付いているだろうケド、僕は中学二年の男子の平均身長よりひ……ひ……低いのだ〜！ うわ〜！ 認めたくね〜！ この世には神も仏もないのかあ〜！

……コンプレックスにより海よりも深く山よりも高く傷付いた心を持って余していると、返事がない事に焦れた兄友がチラリと見上げてきた。

うお、上目遣い。

女の子がすれば可愛く見えるんだろうなあ。でもこんな大男にされるとなんかゾワツと背中に悪寒が……。

「えつと……一応訊きますけど、僕が男だつて知つた上で告白してるんですよね……？」

「ああ。男だつて知つても忘れられなかったんだ。だから
「お断りします」

また好きだ、とか言われる気がしたので言葉を遮るように言う。最初から断るつもりだったし、タイミングなんて気にしない。とつくに慣れっこなので（断る事がね……）あっさりキツパリしっかり断つた方が相手の為だ。

「僕はノーマルで男と付き合つつもりはありません。だから他を探

してください」

兄友はふられたショックからか、頭を下げた状態のまま呆然としていた。……どうでもいいが、腰が痛くならないのかね？ あの体勢……。

踵を返して階段を降りようとした時、チャイムが鳴った。急がないと間に合わないな。

微動だにしない兄友をチラリと一瞥し、僕は教室に向かって歩き出した。

放課後。

用事があるという変人と別れ、僕は一人帰路についていた。一緒に帰ろうと誘う者は結構いたが（例によって男子……一度くらい女子に誘われたいよ……）全て断った。色々メンドーになりそうだし。

自転車を軽快に走らせていると、前方から買い物袋を提げた母さんの姿が。

「母さん」

「あら、お帰り。今日は渡部君と一緒にじゃないのね」

ああ、そんな名前だったっけなあ……。

「用事があるんだってさ。そんな事より、今日の晩ご飯何？」

「今日はすき焼きにしようと思って。父さんが早く帰ってくるって連絡くれたから」

「珍しいね。でもすき焼きなんて久しぶりだ」

「奮発していつもより高いお肉買った！」

嬉しそうに艶やかに笑う母さんは、やっぱり美人だ。それに似ているって事は、世の男どもは僕に、今のと同じ感動を覚えているという事か？ いやいや、僕は男なんだからここまでの事は……。

などと考えているとあつという間に僕ん家に。

母さんはニコニコしながら台所へ。僕は着替える為に自分の部屋へ。

世の良い子というものはここで母親の手伝いをするのが基本なのだろう。だが僕は料理に関しては何もしない。だって、料理が趣味の母さんは少しでも手伝おうとすると普段のお淑やかさはどこへ行った！ とばかりに怒るんだよ……。だから僕の仕事は皿洗いデス。たまに洗濯や掃除を手伝う事もあるケドネ……。

部屋でゲームをしながら時間を潰していると、玄関から物音がした。父さんが帰ってきたみたいだ。

「お帰り」

ゲームを中断して出迎えると、僕の顔を見て鼻の下を伸ばした（比喻ではなく本当に）父さんが「ただいま」と言ってきた。いつも仕事では気難しい顔してるクセに、家ではデレデレしちゃって……。

以前ならここでテンション高めのハグが襲ってきたのだが、最近
はあまりない。勿論僕が脅しておいた（一週間口きかないとか）か
らだが、時々我慢できなくて身を乗り出してきた時には最終兵器を
使う。どうやら今日は我慢の限界を超えたようなので、ポケットに
入っていたブツを取り出した。

「ホイ」

「うおっ！」

それを顔の前に突き出すと、父さんは慌てたように手を伸ばして
きた。だが僕はサツと後ろに隠して自分の部屋へ駆け上がる。ここ
で追いかけて来ようものなら、「何で私にはただいまって言うてく
れないの？」と母さんが拗ねるので、父さんは泣く泣く引き下がる。

僕の最終兵器。それは僕がまだ赤ちゃんだった時の写真である。
母さんに似たんだからまあそれは可愛らしい（父さん談）赤ちゃん
だ。

僕は母さんに協力してもらってアルバムから僕の幼い時の写真だ
けを抜き取って隠したのだ。母さんには素直に見せるケド、父さん
には見せてやらない。こういう時の切り札には打って付けだろ？
・
・
・
もともとこの為に隠したんじゃないんだケドなあ・・・。

変人がヨダレ垂らして見てくるもんだからそうしたのは、こんな
使い方があるとは驚きだよ、うん。・・・泣くもんか！

「ご飯出来たわよ」

階下から母さんののんびりした声が聞こえた。写真を隠してリビ
ングに向かうと、スーツから私服に着替えた父さんが椅子に座って

鍋の中を覗いていた。

テーブルの中央、ガスコンロの上に乗った大きな鍋の中に肉やら豆腐やら糸コンニャクやらネギやら、色んな材料がグツグツと美味しそうな音を立てている。

「美味しそうだ。君もビールはどうだい？」

父さんは母さんにもビールを勧めている。こう見えて母さん、酒には強いからな。

僕は未成年なのでスポーツドリンクで、三人で乾杯。

早速お肉を卵にくぐらせて口に運ぶ。う、美味いー！！

お腹が空いていた事も相まって食が進む進む。ご飯を二杯もおかわりしちゃったよ。一応育ち盛りだからね。お椀はどんぶりです、ハイ。小さい（ぐはっ・・・）身体のどこに入るのかってくらいに食べたぜ！

今日は見たいテレビもないし、早めに風呂に入って寝る事にしよう。父さんが名残惜しそうに見詰めてくるが（それはもう永遠の別れってな具合に）華麗にスルーして風呂に入る。僕は少し熱めのお湯に入るのが好きで、いつも最初に入る事になる。両親はぬるめがいいらしいので、後で入った方がちょうどいいのだ。

さっぱりして出てくると、二人は仲良くテレビ鑑賞。趣味が合うらしく、いつもドラマやバラエティーなど一緒に見ている。

冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出して水分補給をした後、二

人に「おやすみ」と声をかけて階段を上がった。

今日学校に遅刻したから、明日はもう少し早く起きようと思いな
がらも、まだ寝るには早すぎる時間。僕は中断していたゲームの続
きをして時間を潰す。

宿題？ そんなモン学校でしてるに決まってるだろ。家にいたら
やる気なくすからさ。全部学校で済ましているのだ。・・・言っと
くケド、これでも成績は良い方なんだからね？ ノートを見せても
らう側じゃなくて、見せる側なんだからな！

・・・何熱くなってんのかな、僕・・・。

ゲームに集中しよう、うん。

そうしてある程度満足した僕はベッドに入り目を瞑った。さーて、
今日はどんな夢を見ようかな。

告白とすき焼きと・・・(後書き)

こんな駄文を読んでくださる御方は神様です>| |<

違和感と撃沈と・・・(前書き)

ちよつとご都合主義っぽく・・・／(。□／)(＼□)／

今日はあまり時間がなくて少なめです・・・(泣)

違和感と撃沈と・・・

夢の中で、僕は体育館に立っていた。

昼休みに告白してきた兄友が柔道部員だと後から聞いたので、じやあ柔道を習おう、と思ったからだ（そこ、単純だとか言わない！）。

習おうって言っても誰かに師事するワケではない。夢の中なら僕はオリンピックに出られるほどの腕前になってるので（何故かは僕にも謎。ご都合主義？ 何それ）、身体に覚えさせるかのようにひたすら身体を動かすのである。

変だよ、柔道習った事もないのに夢の中では型も身体の捌き方も全部知ってるなんて。

起きた時には知らない状態になるのだが、夢の中で努力した分はちゃんと身についている。だから前に練習した剣の扱い方も、確認がてら竹刀を握って見たらちゃんと経験者のごとく振るう事が出来た。これが夢の凄いところである。

男に襲われて力づく、なんて事があつた時の為に練習してみたは良いが、今のところは披露する機会がないのが幸いだ（さすがに竹刀を持ち運ぶのはちょっと怪しいので、鞆の中にこっそり警棒を潜ませてたり）。

身体中が汗だくになるまで練習して（現実では汗はかいていない）、そろそろ目が覚める時間だろうと動きを止めた。後は覚醒するのを待つばかりである。

「・・・？」

ふと違和感を感じて、体育館内を見回した。別段おかしいところはない。記憶の中にある体育館と全く同じだ。・・・気のせいかな？

頭をガリガリとかきながら首を傾げていると、目の前の景色が揺らぎ始めた。これは目が覚める前兆なので、慌てる事もない。

「今日はラブレターなんてない事を祈ろう・・・」

本来ならラブレターがあったら喜ぶんじゃないだろうか・・・。それが僕の場合、夢の中に逃げ出したくなるほど悲しい出来事になっちゃうんだもんなあ。

あゝあ、女の子からラブレター来ないかな。

徐々に覚醒していく意識の中で、僕はそんな事を考えていた。

さて今日も学校、気持ちの良い天気が憎らしく思えるほどにどんよりした面持ちで、僕は学校へ向かう。

母さんは相変わらずのほほんとした様子で僕にサンドイッチ（今日はハム）を出し、父さんは相変わらず永遠の別れかよ！ って突っ込みたくなるほど悲しげに出ていったのが、まあ多少はストレスを緩和してくれたのだが（ってか朝からストレスって・・・）。

これまた相も変わらず視線（男）が集まってくる中を靴箱目指し

て突き進む（今日は徒歩）。

勿論男なんかに見られるのは気持ち悪いけどね。もうスルーしないとやってらんねーのよ。気にしちゃ負け的な？ ああ・・・目から心の汗が・・・。

「おはよう」

その時後ろから聞こえてきたのは男のひっくり声ではなく、可憐な高い声。こゝ、この声は！

振り向くと案の定愛しの麗華ちゃんいとが！

「おはよう！」

暗闇の中の光明を見出した思いで嬉しさのあまり満面の笑顔で挨拶だ。

すると麗華ちゃん、何故か苦笑。なんで？

「みんな歩夢君が美人だって言ってるの、分かる気がする。あたしより綺麗に笑うんだもん」

・・・何ですと？

思わず目を点にすると、彼女はクスクスと笑って続ける。

「男の子にこんな事言っの、ちょっと変かなとも思っただけど・・・」
「応本心だし」

撃沈。心の中では滂沱ほうたの涙デス。

だって彼女の言葉って、僕は恋人には一生なり得ないって事じゃないかい！？ コンチクシヨウ！！

「あたし先に行くね。今日日直なの」

そう言って駆けていく彼女。

・・・この心、涙の海で、溺れそう。

思わず俳句になってしまっうほど落ち込んでいる僕です。髪が真っ白なんでねーかと思うほどに燃え尽きております。

これはあれか、もう僕はモーターホーに突っ走れという神のお告げデス力。この世に神も仏もないってのは本当なんでシヨウカ。

靴を履き替えようとしていた状態で固まっていた僕は、ポンと肩を叩かれてギギギ・・・と油の切れたロボットよろしくぎこちなく振り向く。そこにいたのは。

「元気出せ。彼女は天然だから、悪気があったワケじゃない。泣くなら俺の胸を貸してやるよ」

慰めてくれる変人だった（今思い出したケド、彼には渡部篤郎っていう名前があるからね）。

「変人・・・」

「ってこんな時でもその呼び方!？」

勿論つい先程まで綺麗にスッパリ名前を忘れていた僕がその名を呼ぶはずもなく。でも今の僕は彼の存在がありがたかった。

「変人〜!!」

先程の変人の言葉に甘えて胸に飛び込んだ。思いっきり泣きながら。

「ええ!? お前がマジで泣くなんて、そんなにショックだったのか!? ってかここでそれはシャレにならないで!!」

そうなのだ。ここは人が通りまくる玄関口なのだ。

学校一の美女(男だつて)との噂である僕が号泣していれば周りは変人を変な目で見るだろう。勿論変人が「胸を貸してやる」と言ったのは冗談だと知った上で、だ。

フッフ、僕だけ傷つくなんて嫌だからな。変人も道連れだ!

・・・後に僕と変人が付き合ってる、なんて噂がたっても、僕は気にしない! 被害に遭うのはどうせ変人だからな! フハハハハ!

・・・今日は厄日ですね・・・。

撃退と影と・・・(前書き)

うん・・・暴力、に入るのかな・・・？

撃退と影と・・・

「そんなこんなで昼休み。」

噂が広まり、変な目で見られ続けた変人が屋上の隅で落ち込んでいるがスルーして、僕は購買で買ったパンと牛乳を摂っていた。いつもなら食堂に向かうのだが、さすがにこれ以上ジロジロ見られ続けるのは可哀想だ、と思つて屋上にやってきたのだ。優しいだろ？僕つて。

「おーい。早くご飯食べないと昼休み終わっちゃうぞ〜」

今朝の僕のようにどんよりしている変人に声をかける。僕？ 普段の僕の気持ちが多量なりとも理解できたであろう変人を見ていたらまた少しストレスが緩和されてね。それはもう良い笑顔を浮かべているさ、うん。変人にジロリと睨まれてしまったケドも。

「わざと抱き付いてきやがってえ。変な噂がたつちまつたじゃねーか・・・」

「今更。変人が僕の母さんを追つかけてるのは周知の事実だからね。でも母さんは父さん一筋、だったらそっくりの息子の方を、なんて噂は女の子の間で流行ってるんだよ？」

「マジかっ!？」

「大マジ。今回の事で信憑性が増しただろうね」

「ぐあ〜・・・なんてこつたい・・・。つてか何でお前がその噂とやらを知ってるんだ？ 女の子の間だけなんだろ？」

「・・・お前がそれを訊くか？ 学校一の美女なんて言い出した奴が」

「あゝ、何となく言っただけだったんだが、一気に広まったなあ。

それはつまり周りの奴らもそう思ってたワケだ。おかげで女の子と仲良くなっただから良い事じゃないか」

「おかげで友達どまりだけどネ？ それ以上には発展しそうにないんですケド？」

「恋人が出来ないのを他人のせいにしちゃいかんよ。これでも歩夢の事を思ってたなあ・・・」

「だったら変人に恋人が出来ないのも他人のせいにしちゃ駄目だね」
「ぐはっ・・・」

変人は母さんの追っかけ、つまりこの顔が好みと言うワケだ。そして僕の近くにいる事で女の子達の趣味的欲求を満たしているワケで。つまり変人にも女の子が寄ってこないという、あら不思議。

ケケケ、中学校の入学式で『学校一の美女』なんてレッテルを貼りやがった罰だ。

なんて嘲笑っていると、階段の方から物音がした。視線を向けると、昨日の兄友が。

すっごい息切らして、顔が真っ赤。いかにも全力で走ってきました！ 的な感じですよ、ハイ。

「え〜と・・・昨日はどーも・・・」

何とも言いようがなく、僕は二ヘラ、と笑った。すると兄友は凄いい勢いで僕の前まで来て、肩をがっしりと掴んで・・・ってか怖っ！ ブルドーザー並みにこえーよ！ 何気に肩掴んだ手がでか過ぎるんだよ！

「あの話は本当か!？」

僕の方じゃこの手を剥がすのは無理かなあ、なんて考えてたら、大声で叫ばれた。耳がいてえ。

「あの話って・・・？」

「君があそこの男と付き合ってるという話だ！！」

兄友が指差したのは変人。変人は思わずといった感で自分の顔を指差している。ってかもうそこまで広まってるんだな・・・。

「昨日君は男とは付き合わないと言ったじゃないか！！ そんな嘘を吐かれるくらいなら、本当の事を言っただけじゃなかった！！」

いや男と付き合わないのはホントだよ、変人なんかと恋人にされた事の方がショックだよ。

あまりにも疲れ過ぎて声に出す事すらできない。それを嘘を吐いた気まずさからだと思っただけならいい兄友は、僕を引き寄せて無理矢理キスしようと・・・ちよつと待てええええ！！

反射的に腕を突き出したが、相手は柔道部員、力で敵うわけがない。

はっ、そういえば鞆に警棒が！ 剣の練習をした僕ならこんな奴・・・！ って鞆は教室でしたああ！！

来るな来るな！ いくらちよつとハンサムでも男になんてええええええ！！

「ギャー！！！！」

人間的にもどうか、と思わなくてもない悲鳴を上げ、顔を思いつきり逸らす。すると兄友がピタリと動きを止めた。

怖がっているのに気付いて止めてくれたのか・・・？ と恐る恐る目を向けると。

「変人？」

兄友の腕を掴んで止めている変人の姿が。と言っても変人だっけ力が強いワケではない。なので兄友がちよいと押しただけでワーツとばかりに飛ばされてしまった。尻餅つくだけでなく、頭を床に打って気絶までした。

「篤郎！！」

さすがに頭が真っ白になって、思わず変人の名前を呼んでしまっただげ。まあ本人は聞こえてないだろうケド。

兄友も一瞬戸惑ったように目を泳がせるが、すぐに僕に向き直って・・・。

「あんた何してくれてんだよ！！」

僕の頭突きが相手の顎辺りにクリーンヒットした。まさかそう来るとは思っていなかったらしく、兄友は一步後退った。

「年上でもあんたみたいなのは敬えねーよ！！」

こんな奴に敬語は必要ない。こんな奴、僕に力があればぶっ飛ば

してやるのに！

昨日夢の中で練習しまくった背負い投げが思い出された。あれならいけるか？

顎を押さえてまだ立ち直っていない兄友の胸倉を掴んで引き寄せろ。相手の方が身体がでかいのもう少し腕力が欲しい、と思っ息を吐くように気合の声を上げると。

ブンツ ドーンツ！！

・・・できました、背負い投げ。そりゃ見事な技でした。でも・・・何であんなに飛んでんの？ 普通は足下に落ちるもんじゃないの？

信じられない事に、兄友は僕から5mほど離れたところでひっくり返っていた。どうやらこっちも気絶したようだ。

僕、そんなに腕力ないよ？ ってか腕力の問題か、これ？

呆然としてみると、変人が頭をさすりながら起き上ってきた。たんこぶでも出来たか。

「これ、お前がやったのか？」

変人も呆然と倒れたままの兄友を見る。

「・・・一応」

肯定はしたものの、一部始終を見ていなければ信じられないと思う。が、さすがは変人と言うか、すぐに信じてくれた。オイオイ。

「さっさとズラかろうぜ。目を覚ますと厄介だ」

どこの盗人のセリフだよ。

僕はそんな事を考えたが、反論する気はない。僕と変人は慌てて屋上を逃げ出した。

ホント今日は厄日だ……。

その姿を見送る影が一つ。だが僕達は全くそれに気付かなかった。

気晴らしと告白(?)と……

午後の授業なんて全く頭に入らなかった。兄友に襲われかけたシヨックもあるが、見事に決まったあの背負い投げ……。

ありえねーだろ、アレ。

などとウンウン悩んでいたために先生の話なんてそっちのけだつた。

変人は打った頭を冷やすために保健室に行ったからだが。

結局昼休みの事はなかった事として変人とは暗黙のうちに通じた。

つてなワケで、キツパリ忘れよう、うん。

……やっぱりそう簡単には忘れられないか。

翌日、僕は電車で三駅乗ったところにある商店街に来ていた。今日は学校は休みで、まあ気晴らしに来てみたのだ。

だつていまだに兄友のどアップが頭から離れないんだもん。おかげで嫌悪感のあまり吐きそうになるし頭痛はするしでホントまいった……。

しかもそれを見た母さんが心配して看病しようとするし、父さんなんか病院に連れて行こうとするしな。いや、病気じゃないからそこまで大袈裟にしなくてもいいんだけどな。

あ、両親にはちゃんと感謝してるよ？ 愛されてるなあ、って実感できて嬉しいし。

でもさすがに二人に付きまとわれるのはちょっと鬱陶しい。だからこうやって外出中なのだ。

「一応お土産は買ってあげようかな」

ちよつとした物でも喜ぶ喜ぶ。そんな両親が大好きです！・・・口では言わないケド。

さて、まずは服でも見ようかな。近くに僕が鼻屑にしている古着屋さんがある。安いし良い物があるので来るたびにいつい買ってしまっただよな。というワケでレッツゴー！

・・・決まらなかったぜ・・・。

トボトボと店から出る。

いつもなら欲しい物が見つかったらすぐに買ってパーツと嬉しい気持ちになるハズなのに！ 何でこういう時に限って欲しい物がないんだあ〜！！

心の中で絶叫です。声に出したら変な目で見られんじゃん。

せつかく気晴らしに来たんだから、パーツとしたい。どうすっかな。

・・・よし、変人呼ぼう。

あいつならどうせ暇だろうし、母さん似の僕の呼び出しなら何が何でも来るだろ。

「え〜と、あいつの携帯番号は、と」

携帯電話を取り出し、登録されている番号を表示させる。その時。

「進堂歩夢君」

名前を呼ばれて振り返った。そこにいたのは僕よりも背が高い男。あの兄友ぐらいあるんじゃないかなろうか。だが目の前にいる男は細身で、おまけに兄友よりハンサムだった。

・・・兄友基準なのが悲しい・・・。

ただいま喫茶店にてアイスコーヒーをいただいています。テーブルの向かいには美男子。

案内された席が奥まったところではあったが、店にいる客達の視線が痛いです・・・。

隣のテーブルからは見知らぬ女性達（三人）がひそひそと話していらっしやいます。まあ、声大きいので丸聞こえですが。

「あの人カッコいいね〜。身長高いし、優しそうだし」

「うん。彼女が羨ましい〜」

「でも彼女も可愛いよね。美男美女カップルってやつ？」

・・・泣いていいですか？

三人の会話を聞けば誰でも分かると思うけど、美男美女カップルっていうのは僕達の事です。僕は美女じゃないのに・・・。今着ている服はちゃんと男服ですよ。

あれか、ボーイツシュだとかいうのに見えてんのか、僕は。しかも目の前の男、優しそくに微笑みながらこつちを見てるんです。そりゃ恋人にも見えるってもんだ。

・・・連日厄日ですか？ そーですか・・・。

ずっと黙ってアイスコーヒーを飲んだけど、さすがにこの空間が痛いのでさっさと話してもらおう。

「何で僕の名前を？」

あ、離れたテーブルについてる男どもが「僕っ子」とか言いやがった。クロス。ってか店の中シーンとし過ぎて会話丸聞こえじゃね？

「有名だからね。学校一の美女だって」

この男、周りの視線に動じてねーな。慣れてるのか？ ってかそれを知ってるって事は同じ学校の生徒？ こんな美形なら女どもが黙ってねーハズ。

「俺は上村稔^{ウケムツノノブ}。君の一つ上だよ」

中三か。見えないな。高校生だって言っても通じるぞ。・・・羨ましい。

「最近転校してきたばかりだね。あまり友達がいらないから、仲良くしてくれると嬉しい」

・・・爽やか青年・・・。なんか毒気を抜かれる相手だな・・・。

呆気にとられていると、上村はさらにニッコリ笑って続ける。

「昨日の昼休み、凄かったね」

ピシッ、と僕の身体が固まった。

「まさかあんなに飛ぶとは思わなかったよ」

・・・見てたのか？ あれを見てたのか！？ どうしよう、こは誤魔化すべきか？ でも見られてたなら何を言っても誤魔化せない気が・・・どうする？ どうする〜!？

固まったまま、内心でグルグル悩んでいると、爽やか青年が一言。

「大事な話があるんだ」

「ほえ？」

あ、つい間抜けな声が。ってか隣のテーブルから「告白か!？」とか黄色い声援が・・・うるせえ。

気晴らしと告白(？)と・・・(後書き)

いや、周りから見たら告白・・・(笑)

秘密基地(？)と警察(憧れ)と・・・

上村に連れられてやってきたのはとある三階建ての塾。の、エレベーター。

そりゃ中学生だから通っててもおかしくないケド、何でこんなところ？ と首を傾げていると。上村は僕を見てフツと笑った。

「ここじゃなくても出入口は他にもあるよ。おいおい教えてあげる。今はこれを覚えてね」

出入口？ と再び首を傾げる。

上村の指がボタンを押した。が、一つだけじゃなくていくつかのボタンを押して、最後に『開』と『閉』のボタンを同時に押した。するとエレベーターの扉が閉まり、階数表示は上が上がっていくのに、エレベーター自体は下へと降りていくのが感じられた。

何事！？ と目を見張っていると、上村にクスクスと笑われた。いや、驚くのは当然の反応だろ。

やがてエレベーターがゆっくりと止まった。

扉が開いた先は、塾はどこ行った？ ってな光景。長くて広い廊下が続いているのだが、研究者か？ ってな白衣を着た男性や女性がいっぱいいるし、中には警官みたいな制服を着た人達もいる。

制服、カッコいいなあ。男なら誰だって憧れた事あるんじゃないか？ 将来警官になりたいって。

かく言う僕も子供の頃（もつと小さい時な）警官になりたいって
ずっと思ってたもんだ。

ん？ 今？ そりゃー、あれだ、うん。子供の頃の思い出は大事
にしないとなく。・・・ハイ、今でも憧れてマスが何か？

廊下を歩きかう人々をチラチラと見ながら、奥へ進んでいく。左
右にドアがたくさん並んでいるが、上村は全部無視して奥へ。

つきあたりを右へ曲がったところで、一際大きなドアがどーん、
と目立っていた。

なんじゃこりゃ・・・。まるでテレビで放送されてる戦隊モノの
秘密基地みたいなの・・・。

分かるかな？ 真ん中から左右に開く大きな自動ドアね。これま
たカラフルな色彩で、お約束（なのか？）な赤、青、黄、ピンク、
緑・・・あれ？ 黒ないのか？

上村が「失礼します」と言いながら入っていく。僕も少し怯みな
がらも「失礼します・・・。」と言って中に入った。

中は普通だな・・・。入ってすぐの感想だ。

どこにでもある会社の事務室みたいな感じ、と言えば分かるかな。
机がたくさんあって、書類やらファイルやら何やらが色々と散乱し
ているあれだ。

上村は僕を、部屋の奥で指示を出している男のもとへ連れていっ

た。他の机や椅子より大きくて立派な物に腰掛けている姿は、社長
みたいだな、と思った。

「こんにちは、進堂歩夢君」

男が立ち上がって手を差し出してきた。それがあまりにも自然だ
つたから、僕は訝る暇もなくその手を握って握手していた。小さい
僕の手（不本意だ〜！）より一回りは大きい手は、温かくてちよつ
と安心できた。

「あの、あなたは・・・？」

ここは何なのか、とか何故ここに連れてきたのか、とか質問した
事は色々あるが、混乱したままでは話も出来ない。つてなワケで、
冷静になるためにも目の前の人物を知ろう。

「私は村田源蔵^{むらたげんぞう}。ここの責任者だな」

そう言ってニツコリ笑う顔は女ならコロリと一発で落ちそうな美
形である。名前はもろ日本人だけど、外国の血が混じっているのか
鼻が高い。目の色が明るい茶色だった。

「いきなりこんな所へ連れて来られて混乱しているだろう？ まず
は落ち着くためにお茶を用意しよう。そこにかけてくれ」

村田氏が指し示したのは部屋の隅に設置されている、テーブルを
挟んだ向かい合わせのソファだ。とても座り心地が良く、思わず安
堵の溜息を吐いたくらいだ。僕の部屋に欲しいな、コレ。

上村がお茶を置いてくれた。僕の好きな玄米茶だ。・・・フツ、

玉露とか出すもんじゃないの？ まあ、僕は気にしないケド。

「君が好きなお茶だと聞いて用意したんだ。高級な物でなくて悪いね」

「え……」

顔に出した覚えはないんだケド……。ってか何で僕の好みを知ってるんだ？ まさかエスパー？

「ああ、悪い。君の事を少し調べさせてもらったんだ。だけど悪いようにはしないから安心していい。ちなみに私はエスパーじゃないよ」

……あれか、読みが早いのか。頭が良いんだな。さすが秘密組織（？）の責任者。

僕は一応お礼を言ってお茶に手を伸ばす。

ズズ……と一口飲むと、香ばしい味が口の中に広がる。うん、美味い。

「さて。落ち着いたところでこの組織について説明しようか。名称は特別警察外部組織といって、まあ君が知る警察とほぼ同じ、だな。そうだな……国家公認の探偵つとところかな。捜査が主で、基本的には警察と連携している。一応警察官も所属しているから、どうしても信じられないって言うなら警察手帳でも見せてもらえば納得するんじゃないか？」

って事は、さっき廊下で歩いていた制服の人達は本当に警官だったんだな。

「いきなりこんな事を言われても戸惑うだろう。上村君、実演頼むよ」

「はい」

なんか矛先が隣に座っていた上村（いつの間にも……）に向いたのでそちらを見る。すると彼は携帯電話を取り出した。

誰かに連絡でもするのか？ と思った次の瞬間。何とそのケータイが宙に浮き上がりましたよ！

つい瞠目したね、うん。

試しに掌をケータイの周りにかざしてみたが、糸でつっているワケではないらしい。

首を傾げていると、上村はケータイを動かして天井近くまで浮き上がらせた後、手元に戻してハイ、とばかりに僕に渡した。

「何の変哲もないケータイだよ。勿論種も仕掛けもない」

確かに矯めつ眇めつ見てもケータイは普通のケータイだった。

教えてくれ、とばかりに無言で返すと、これまた女が一瞬で撃沈しそうな微笑みを浮かべて説明してくれた。

「俺の能力は念力。手を触れずに物を動かす事が出来る。精神遠隔感応・・・テレパシーと言った方が分かりやすいかな？ その力も少しだけ持つてるんだ。だから超能力を使った者がいればすぐに感じ取る事が出来るんだよ。人の心を読む事は出来ないけどね」

・・・つまり、僕から力を感じ取ったから声をかけたよ。

「彼の他にもう一人超能力者がいるが、今は用事でいないんだ。まあ何が言いたいかというと、この組織は超能力者の協力のもと、捜査を行っている。さすがにそれを公表するわけにもいかないからね」

村田氏はズズ・・・とお茶をすすりながら言う。

その動作も様になっているというか・・・さすが男前だなあ。

ん？ 僕？ 僕はホラ、見た目が美少年・・・ハイ、スイマセン、美少女ですね、に見えるらしいから・・・様になると良いなあ。ああ、目から汗が・・・。

「話は変わるけど、殺人事件だけで年間何件起きているか知っているかい？」

・・・唐突だな。ってかそんなん知るワケねーっつの。

「認知件数で約千件くらいだね」

答えてくれたのは上村。つつか多いんだよな？ その数。他の犯罪も合わせたら凄い数になるもんな。

「じゃあ、その二%が超能力者の仕業だとしたらどうする？」

「え・・・」

僕は再び間抜け面に。村田氏は先程までの笑みを消して真剣な表情で続けた。

「数で言えば少ないように感じるかもしれない。でも超能力者自体
そう何人もいるワケじゃないんだ。それを考えると、多いと思わな
いか？」

「・・・確かに。どんな能力があるかは知らないケド、殺人なんて
能力を使えば簡単なものかもしれない。」

「勿論殺人だけじゃない。強盗、傷害、詐欺・・・例を挙げればき
りがない。超能力者というのはそれだけ恐ろしい存在なんだ」
「・・・・・・・・・・」

恐ろしい存在、確かにそうかもしれない。普通の人間なら怖くて
怖くて、関わり合いになりたくないと思うだろう。

僕に超能力者だという自覚なんてない。それでも、とても身につ
まされる話だと思う。

と、僕が暗い顔になっていると。村田氏はパツと笑みを浮かべて

「だから私達で恐ろしくない存在にしてやろうじゃないか」
「・・・・・・・・・・は？」

この人本当に唐突だな・・・。

多分に呆れ交じりの視線を向けても仕方ないよな？

「ここではまず能力が暴走しないようにコントロールする術を身に
つけてもらうんだ。そして・・・陳腐な言い方だが、『正義の味方』
だと周囲にアピールする。そうやって少しずつこの組織を表に出し

ていきたいと思っっているんだ。これからも出てくるであろう超能力達の為に」

「・・・・・・・・」

何と申しましょうか・・・。

いや、素直に凄いと思ってるよ？ この人自身は超能力は持ってないのにも拘らず、ここまで超能力者の事を考えてるし。顔もすっごい真剣だし、本心だという事も分かる。

ただね・・・目がすっごいキラッキラしてんですよ・・・。ここまで聞いて、断るわけないよね？ って言われてるような気になるぐらい。

そりゃ僕だって正義の味方（ハズい・・・）の方が良いよ、恐れられる存在よりは。でもさ・・・僕が超能力者だって証明されたワケじゃないんだよ。フツーそれが最初でねーか？ 持ってるとして、どんな能力なのかもさっぱりだしな。だからまだ返答に困る段階っつー事で。

今述べた最後の方だけを伝えると、村田氏は納得したように頷いた。

「それもそうだ。では上村君、彼をあの部屋へ。まずどんな力なのかを知らないとな」

あの部屋？ よー分からんが、悪い事はないだろうと上村の後をついていく。

そしてあの秘密基地の扉から出ようとしたら、村田氏に名を呼ば

れた。

ん？ と振り返ると彼はとてつもなく良い笑顔で

「ちなみにここに所属すると警視の階級とほぼ同じ権限が与えられるし、給料も出る。そして身分証明として警察手帳も」

「協力します！」

あ。

僕の顔が赤くなったのが分かる。

村田氏はクッククックと笑ってやがります。傍らの上村も肩を震わせて笑ってやがります。

だって警察手帳だよ！？ 誰もが憧れたハズのあの！！（え？

憧れなかった人もいる？ それはまあ・・・アレだよ、うん。スル

ーでお願いします）

ドラマで黒い手帳が出てくるたびにドキドキしたもんだよ（子供かって？ そーだよ、僕はまだ子供だよ、悪かったな！）。

勿論それだけじゃない。さらに重要なのは『給料』なんだよ！！世の中金だろ！？ 金！！（そこ！ 本当に子供かよ、とか言わない！！）

だってウチの両親、デレデレのあまあまのクセにお小遣いに関しては厳しいんだよ・・・。まだ大金を持たせるには早い！ って月に千円だぜ、千円！ ありえねーよ！ マンガ買うだけで終わりだぜ！？ まあ昼食代は別だけだな。

他にも服やゲームなんか欲しい物はいっぱいある。どうしても欲しい物だけ、お小遣いを少しずつ貯めて買うようにしてるケド・・・正直不満タラタラです。それでも文句を言わない、出来た子ですヨ。

とにかく、早々と特別警察外部組織に所属が決まった僕でした。

能力とスレンダー美女と・・・（前書き）

ちよつとシリアス入ってきてるような・・・。
コメディーはどこだ〜。

能力とスレンダー美女と・・・

上村に案内されてやってきたのは、とてつもなく広い部屋だった。周りは白い壁で囲まれており、ちよつとやそつとの衝撃では壊れない仕様だという。ここで超能力の訓練を行うらしい（普通の人は入れないんだって）。

ここまで来る間に、僕は上村から色々な話を聞いていた。

まずこの組織は出来てまだそう時間が経っていないらしい。一年くらいだって言ってたな。それなのに犯罪を犯して捕まえた超能力者は四人にもものぼるといふから驚きだ。

あの村田のオッサン、結構優秀なんだと。

んで捕まえた超能力者達は、組織に協力するか能力を封じて刑務所入りするかを選ばせるらしい。

封じる事が出来るのか、と驚きの声を挙げると、上村は優しく答えてくれた。

なんでもサイキックリングなる物があるのだと。腕輪の形をしており、能力を使おうとすると軽い電流が流れるらしい。軽いと言っても痛みはハンパないしヘタすれば失神する恐れもある。

ホントヤベーよな、それ。

ってかあんたサドか？　って訊きたくなるくらいその爽やかな顔やめて。

超能力者を逮捕する時にも大活躍らしいそのリング。

見してもらったらメツチャ綺麗な銀色でした。アクセサリーだつて言っても信じられるくらい、凝った彫刻だったしな。欲しいなと思ったのは内緒で。

あ、そうそう。捕まえたのは四人だつて言つてたケド、そのうち三人は更生中、らしいそーです。何かあまりにもガラが悪過ぎて、協力してもらつどころじゃねー、つてワケですよ。

残る一人は力を封じて普通に戻る事を選んだらしい。罪自体、軽いもんだつたらしくすぐに釈放されたんだと。今は普通に暮らしているらしい。

最後に、上村は僕に「ありがとう」と礼を言ってきた。上司が唐突なら部下も唐突になるのか？ って本気で考えたヨ。

僕が首を傾げると、クスリと笑つた上村が頭を撫でてきた。いや、だから説明プリーズ！ それと子供扱いやめ！

「超能力者を捕まえる、なんて言葉で言うのは簡単だ。でも実際に行動するとなると危険な事はたくさんある。それは頭の良い君なら分かってる事だと思う。だから、組織に協力してくれる事に感謝しているんだ」

それでありがとつ、か。でもフツ、上村が言う事じゃないよな気がするんだが……。

「村田さんも感謝してるよ。多分俺よりも。あの人、本当は俺達を

危険には巻き込みたくないって思ってるから」

「……そうは見えなかった気がするの、は気のせいかな。そうか気のせいかな。」

僕の心の呟きを、表情から読んだらしく上村はクスクスと笑う。

「誤解されやすいからねえ。ああ見えて誰よりも超能力者の事を考えているんだよ。だからせめて俺達が怪我をしないように、気を遣いすぎるほど気をつけてる。サイキックリングもその為に作られたからね」

まあ逮捕の時には役に立つかもだケド……

「警視とほぼ同じ権限が与えられるっていうのも、異例な事だよ。だって俺達はまだ若い。子供にそんな権限与えるなんて、普通は正気を疑うよ?」

「……物腰が柔らかいから気付かなかったケド、上村って結構ズバズバ言うよね。やっぱりサド決定?」

「まあ、そんな無茶しちゃうほど優しいんだって事は覚えておいてあげてよ」

そう言う上村は村田氏を尊敬しているらしい。

ん……何か親に対する親愛の情、みたいな感じかな?

そこで僕は彼に訊いてみた。

「何で村田さんはそこまで超能力者を気にかけるんだ？ 彼は超能力者じゃないんだろ？」

すると上村は悲しそうに表情を歪めた。

「村田さんの娘さんが超能力者なんだ」

ほえ？ あの人子供いたの？ 若く見えるのに。

「今は八歳くらいかな。村田さん、早くに結婚してるから」

なるほど。ヤンパパ（笑）だな。

「でも娘さんは今、意識不明で入院してる」

「え……」

「五歳の時からずっとだよ。原因は能力の暴走。まあ小さかったから、上手くコントロールできなくて……。それまでも娘さんの為にずっと頑張ってたんだけど、意識不明になってから一層張り詰めるようになって。娘さんみたいな事が二度と起きないように、村田さんは俺達を気にかけてるんだ」

「……」

そんな事があつたのか……。

正直、少し村田氏を舐めてた。若いつていうのもあつたケド、僕を見る目が子供を見る目だったから。

確かに僕はまだ子供だし、それは仕方ない。でも中学生って大人びたい年頃じゃん？ あんまり子供子供、って言われると反発したくなるんだよね。

でも村田氏の言う子供っていうのは守りたい対象って意味なんだな。それが分かっただけでも、訊いてよかったと思う。

「さて、じゃあまずは身体検査と行こうか」

上村はそう言って壁のパネルを操作した。すると壁の一部が開いて、小さな部屋みたいなものが出現した。

「中に入って、中央に立ってくれる？ それだけで周りのセンサーが身体を調べて、モニターに情報が映されるから。痛みも何もないから心配しなくて良いよ」

分かりやすく説明してくれるのは嬉しいんだけど・・・何か子供扱いされてるようで複雑だ・・・。

村田氏の子供扱いは許せる。だが上村の子供扱いは・・・（歳は一つ離れてるだけだぜ？）

そう思いながら僕は小部屋に入った。

形としては正方形。大きさはレントゲン室くらいか？ 入った事ないから良く分からんケド（笑）。身長が高い人が入れば、窮屈に感じそうなほど狭い部屋だ（どうせ僕は余裕だけどな、フン！）。

中央に立って待ってるだけなので、スピーカー越しに上村と話を続けた。

そこでどうでもいい事ではあるが気になっていた事を訊いてみた。

「村田さんがいた部屋の扉、なんか戦隊ものの秘密基地みたいな感じだったケド、アレ意味あんの？」

すると上村は一言、

「村田さんの趣味」

・・・尊敬という言葉がガラガラと音を立てて崩れていくような気がした。

健康問題ナシ。身体に異常はない。あえて言えば身長が平均より低い事が懸念事項。

今述べたの、僕じゃないヨ？ モニターを見ながら上村が読み上げたのだよ？ コンプレックス刺激マックスなそんな事、自分で読み上げられるワケナイヨ？

・・・この装置作った奴出てきやがれ！！

などと怒りに滾っている僕ですが、ちゃんと自重しましたからネ？ 僕は大人、大人、大人、大人、大人、大人・・・

「じゃあ次は君の能力についてだね。本来ならこの装置である程度は調べられるんだけど・・・どうしたの？」

上村の訝しげな声でハッと我に返る僕。無意識のうちに口に出して呟いていたようだ。

コホン、と誤魔化すように咳払い一つ。

「何でも無い。モニターを見る限り能力については表示されていないみたいだケド・・・？」

「そうなんだよ。本来ならあそこに能力の種類や強さを表示するはずなんだけど・・・」

そう言つて上村が指差したのはモニターの右上。そこには何も書かれていなかった。

「もしかしたら今までにない新しい能力なのかもしれないな」

ナ又？

思わず深く思考している上村の顔を見上げる。

僕の問いかけるような目に、彼はゆっくり答えてくれた。

「超能力者つて、日本だけでなく世界中にいるんだよ。アメリカなんてもつと昔から似たような組織が出来てるくらい。この装置には今までの超能力者達の情報がインプットされていて、そこからだいたい能力を示してくれるんだ。俺の場合は『念力、中』と『テレパシー、弱』だね」

中とか弱は強さの事だ。

「それが表示されないという事は、今までに例のない能力、という事になる」

ん・・・つまり僕的能力について全く分からない、というワケ

か。

「それでどうやって能力について調べるの？」

「日常生活で何か心当たりがないか教えてくれる？ 推測ではあるけど、それで分かる事もあるから」

推測か・・・何とも頼りないなあ・・・。

「昨日大男を投げ飛ばしていた時、力を感じただけ」

う・・・それについては黙秘したい・・・。兄友の事なんて思い出したいくないヨ。

「えつと・・・心当たりと言えば・・・夢かなあ」

「夢？」

「夜寝ると夢を見るでしょ？ 僕は夢の中なら何でもできるんだ。空を飛ぶ事も出来るし、水の上を歩く事も出来る。剣士だと思えば軽々と剣を扱えるし、空手や柔道、クンフーでもプロ並みに戦えるようになる」

・・・なんか『子供の夢』ってカンジ？ まあその通りなんだけども。

ってなワケで、僕は今までであった事を上村に話した。剣士並みの腕を持つ事も、柔道についても、そして最近違和感がある事も。

「違和感？」

顎に手を当ててウーンと唸っていた上村は、最後の僕の言葉に唸りついてきた。

「うん。初めは持久走で走ってる時に、『空を飛べたら』って思ったんだ。そしたら身体が軽くなった。それと昨日の・・・大男・・・を投げ飛ばした時も・・・」

ああ、尻すぼみになってしまっ・・・。だってマジで嫌なんだもん！

「そうか・・・もしかしたら・・・」

ん？ 上村、何を納得してんだ？ ちゃんと僕にも教えてくれよ。

「たぶん、君の能力は」

「ミノルン、たっだいまっ！」

上村の声を遮る高く明るい声と同時に、僕の後頭部に凄く柔らかい感触が。な、なんか気持ちいいな。

そして気付けば後ろから抱き付かれる体勢に。あれ？

「命音・・・騒がしいですよ。それに歩夢君が硬直しているじゃないですか」

上村が謎の人物から僕を助け出してくれた。・・・ちょっと惜しい気がしないでもない。

それはともかく。僕は突然乱入してきた人物を見上げた。

・・・美人だ。それが初めに思い浮かんだ言葉。そして・・・身長。

見た目年上つてのは分かるよ、うん。でもこの人・・・高過ぎない？ 僕より一回り大きいよ・・・？

横幅は細い。スレンダーだ。ただ、思わず肩凝らない？ って言いたくなるほどの胸が・・・。視線そこに固定していい？ あ、ダメですか、そーですか。

あと髪が長い。黒くて艶やかな髪が腰くらいある。綺麗だなあ。

ポカンと見惚れていると、彼女はニツコリと笑って手を差し出した。あ、握手ね。

手を握り返すと、彼女の顔がニヤリと黒く・・・へ？

「えい！」

「うわっぷ！？」

グイッと引つ張られた。おまけに胸に頭を押し付けられた（！）。

「可愛い！ お持ち帰りしたい！ これちょうだい！！！」

何か上の方でのたまってますが、僕の方はそれどころではない。

く、苦しい〜！

息が出来ません！ いや、柔らかくて気持ちいいんですヨ？ でも窒息しそーなんです！ 放してほしくないんだけど、放してええええ〜！！

再び上村に助けられました（泣）

音と夢と・・・

やっと僕の息が整って落ち着いた頃。彼女と挨拶しました。

彼女は小林命音こばやしめいねといって、高校一年生らしい。訊けば彼女、平均身長より高いらしいです・・・。そりゃ僕より一回りも大きいハズだ・・・。

「アタシ可愛い物好きだからサ。アユミンはバツチシアタシの好み！」

・・・喜んでいいものだろうか。ってか早速あだ名つけられてますヨ。

口元を引くつかせていると、上村が溜息交じりに追加補足

「彼女がもう一人の超能力者だよ。能力は『音』。遠くまで声を届ける事が出来るし、相手に不快な音を出して動きを止めたりできる」

ああ、サポート役みたいなものかな？　と思っていたら。

「他にも振動させる事で相手の脳を揺さぶって気絶させたりも出来る。音は振動が伝わって起きるものだろう？」

・・・バリバリ戦闘要員ツスね・・・。

今さらだケド、後悔という文字が頭の隅で点滅してマス。この二人についていけるのか、マジ不安です・・・。

「それでアユミンはどんな能力なの？」

・・・それを上村が説明しようとしてたんだろ・・・。

「ここで僕と上村の溜息が重なった。気が合うのう、同志(?)よ・・・。なんて目で見合わせました。」

「歩夢君の能力は、たぶん『夢の現実化』だと思う」

「夢の現実化・・・？」

「話を聞いてると、どうもそんな気がするんだよね。試しに今こいで飛んで見せてくれないか？」

「ええ!？」

いきなりそんな事言われても！ 使い方分かんないよ!？

「昨日の事や、違和感があった時の事をよく思い出してよ。どうすれば力が使えていた？」

どうすれば・・・？ あの時は夢中だったからなあ・・・。夢の中なら思うだけで出来ただけだ。」

ってなワケで、夢の時のような感覚で思い描いてみた。

「・・・」
「・・・」
「・・・」

・・・何も起こらん。

思わず深い溜息。

「もっとよく思い出してみて。昨日は凄かったじゃないか」

だ〜！ 昨日の事はあまり思い出したくないって何度も言ってるだろうが！！（心の中で）

でもそれだとずっとこのまま・・・それも勘弁してほしい。

昨日昨日・・・ほぼ無意識に封印していた記憶をさらってみると。

心に百のダメージ・・・じゃなくて！ あの時迫る兄友を止めようとした変人が突き飛ばされて。それで怒り狂ったんだよな（いや〜、腐れ縁とは言え、あんなんでも一応は友達だしな）。んでアイツの胸倉掴んで〜・・・あ。

一つ思い出した。早速確かめてみるか。

俺は空を飛ぶイメージを思い浮かべながら、息をゆっくりと吐き出した。すると・・・

「うわっ！」

浮いた〜！！ マジで宙を浮いてる〜！？

飛んだよ飛んでるよ飛びましたよ奥さん！（誰だ）

夢の中で散々飛んでたから慣れている。ハズだが、今はあまりの衝撃に驚き過ぎてバランスを崩してしまった。

結果、落ちましたよ、え〜落ちましたよ、上村の上に。ってか僕

を助けようとして一緒に倒れちゃった、つてのが正解ね。

まあおかげでどこも痛くないし、ありがたいこつてっす。

礼を言っただけで起き上がったケド、出来なかった。見ると上村の腕がガツチリと僕をホールドしてます。ちなみに今の体勢は仰向けのうづつ伏せで倒れている僕。背に回った腕を退けてほしいんだが……。

「え〜と……上村……？」

恐る恐る顔を見上げると、そこにはやはりこれでもかかっていうほどの素晴らしい笑顔の彼が。

「歩夢君って軽いね。とても可愛いし、天使みたいだね」

ピキーン、と固まりました。

え？ 何？ ケンカ売ってんの？ それともお前の目は節穴か？

などと半眼で睨んでやったら、クスクスと笑いやがりました。ハイ、ケンカ売ってんですね。

「ずるい！ アタシも〜！」

そのケンカ、買ってやろう！ と思ってたのに、後ろから小林さんがドーンと……。あ、上村潰れた。

サンドイッチは好きだケド、中の具を実際に体験するのは苦しいのだと身をもって実感いたしました。

能力が分かったので村田氏に報告。何故か僕から離れない小林さんを子なき爺の如く背負いながら（足は地についてますが）。

「ふむ・・・夢の現実化か・・・。略して『夢現』^{むげん}だな。とても珍しい能力だ。こりゃ色々期待できそうだな」

何を期待してんだ・・・。訊くのがコワイので、黙。

「さて、ここに所属するにあたって何だが・・・」

ん？ 警察手帳貰えるのか？

「君のご両親と話がしたい」

「・・・え」

「当たり前だろう。君を危険な目に遭わせるかもしれないんだ。きちんと了承を得ないと」

確かに。そういう事すっかり忘れてたよ。でも・・・

「僕、両親に力の事話してないんです」

そう言うと、村田氏は困ったように頭をかいた。

「だよなあ。普通は隠すもんなんだよなあ。だったら・・・他に理由をつけて説明するって方法もあるが・・・どうする？」

どうする？ って言われてもな。ウチの両親、僕に激甘だから話

しても嫌いになったりはしないと思う。でも心配をかけそうで嫌なんだよな……。

「上村と小林はどう説明してるの?」

傍らの二人に訊いてみた。すると二人は苦笑。何故に?

「稔で良いよ。俺は村田さんが親代わりだからね。その点は大丈夫」「アタシも命音でいいよ。アタシは孤児だからサ」

……何と。明るく悪戯好きな二人に暗い過去が!?

「ご、ごめん。嫌な事訊いちゃった……」

しょんぼり頂垂れると、二人は気にしてない、と頭を撫でてくれた。これは子供扱いじゃないから許せる。

「……僕、全部話します。隠し事したら余計に心配されそうだし。何より両親を信じてるから」

キツパリ口になると、村田氏は満足そうに頷いた。上村が苦しそうに顔を歪めていたけど、どうしたんだろう?

「それなら善は急げだ。今日ご両親は?」

「仕事が休みなので家にいると思いますが……」

「よし、今から君の家へ行こう」

「……ええ!?!」

というワケで、村田氏にほぼ引きずられながら帰宅する僕達でした。

音と夢と・・・(後書き)

そろそろストックが・・・。毎日更新が目標でしたが、もしかしたらできなくなる可能性がああ～\。口\)(ノ口。)\ノオ口オ口つてなわけで、書いている間は違う話(完結済み)を載せるか?と思案中。

迷子とパートナーと・・・(前書き)

やっとなさ更新デス・・・

迷子とパートナーと・・・

結果。両親の了承が得られました。

いや、結果だからね？ 簡単そうに聞こえるけど、実際はかなりの時間を費やして説得しまくりましたよ？

最初は渋りに渋りまくってた父。まあ超能力なんて不確かなもの、そうそう信じられないからね。テレビで報道されてればともかく、それが普通の反応だ（ちなみに村田氏は報道規制までやっているらしいです、スゲー）。

けど僕が軽く宙を浮いてみせると、目を真ん丸にして驚いていた。その後父も母も凄い凄い！ とはしゃぎまくって落ち着かせるのに時間がかかった。良くも悪くも変わってるよね、ウチの両親。

まあそんなワケで、危険に関しては善処するとの村田氏の言葉で、両親は心配そうにしながらも了承してくれた。

「良かったな、了承してもらえて」

時間がかかって遅くなってしまい、泊まってはどうかと言う両親を丁寧に断り、村田氏は自分の車へ。見送りに出た僕は村田氏の言葉にコクリと頷いた。

「これから心配かけそうですけど・・・」

「何を言う。子供は親に心配かけるものだと言っている。そんなに気にしなくて良い」

「はい・・・」

頭をクシャクシャと撫でられ、抵抗せず受け入れる。上村がこの人を慕うのも分かるよ。今日、僕の為に必死で説得してくれたしね。

「それじゃ、明日、朝十時に来てくれ。渡す物や他にも説明しなければいけない事がある。入口とパスワードは分かるかい？」

あの塾のエレベーターの事だな。

「あそこ以外にも出入り口はあるんだが、それも追々説明しよう。おやすみ」

村田氏は車に乗り込み、軽快に走らせて帰っていった。

家に戻ると、両親はどこかワクワクしたような目でこちらを見た。な、何だ？

「歩夢、もう一度パパとママに力を見せてくれないか？」

「見たいわねえ」

・・・好奇心バリバリか？ 外見は美女と野獣くらい違うのに（別に父さんが醜いワケではない）似た者同士なんだよなあ。

僕は仕方なく能力を使って見せた。

今度は某忍者アニメのように壁を歩く（一度やってみたかったんだ、コレ）。歩きたびに二人からおー！ と歓声上がるが、天井に立って逆さまにぶら下がるとさすがに少しオロオロしていた（父さんが。母さんはのほほんとあらあらとか呟いていた）。

更に乞われて浴槽に張ったお湯の上まで歩かされた。僕自身色々試せて良い経験になったとは思う。でも・・・二人の好奇心は止まるところを知らなかった・・・。

おかげで寝不足です・・・。

翌日、僕は欠伸を噛み殺しながら塾へ向かっていた。勿論あの地下組織に向かう為である。

・・・こう聞くとなんか悪いイメージがあるのは気のせいか？

上村が押していたボタンを思い出しながら、最後に『開』と『閉』を同時に押す。

エレベーターは昨日と同じく下に降りていく。

扉が開いて、長い廊下を歩いていると、周りの視線が・・・つてなワケでもなく、みんなバタバタと忙しそうにしている。これは僕にとっては嬉しい誤算だ。

女ならともかく、男からの視線は浴びたくないからな・・・。

などと遠い目をしながらドアが並ぶ廊下を歩いていると。

バン！

突然目の前のドアが開いた。

あぶね〜！ もう少して顔面クラッシュするところだったぜ！

マジであと一歩進んでいたらぶつかってましたよ・・・。

勢いよく開け過ぎなんだよ！ と文句を言ってやるうかと出てきた人物を見上げると、相手はこっちをジーンと凝視してやがりました。女ではなく男が！

「いきなりなに」

ヒョイ

文句を言おうとしたら、突然身体を持ち上げられました。何故に？

「迷子か？ 親についてきてはくれたのか？」

・・・コロシていいですか？

殺意が湧いたのはホントです。

脇を掴んで持ち上げながら顔を覗き込んでくるのは三十代前半くらいの男。少したれ目でカッコいいと言うほどではないが、笑うと優しいそうなおじさんである。

何気に僕を軽々と持ち上げてらっしゃいますが、力持ちですか。

・・・僕の体重が軽いかじゃない事を願う。

「いや、迷子じゃなくて・・・ってかおろして」

「これから村田さんのところに行くから、ついでに放送してもらおう

か

迷子センターか、ここは！？　　ってか迷子じゃねえええええ！！

抱っこされたまま運ばれそうなのでジタバタ暴れる、暴れる。が、相手はビクともしません。むしろ宥めるように頭を撫でられてしまった……。

もう好きにして……。

疲れてしまった僕はグッタリ状態で運ばれましたよ、ハイ。

「失礼します」

あの秘密基地っぽい扉を開けて、男が入っていく。勿論腕には僕のおかげで視線が痛い。さっきまでの幸福を返せ。

書類を真剣な表情で見ていた村田氏がこっちに気付いて視線を向けた。

あ、吹き出した。でも笑う事はしないでくれたよ、優しいネ。肩が震えてるのはこの際無視しよう、うん。

「おはよう、土居君。君の子供は女の子、しかもまだ五歳じゃなかったかな？」

……わざとらしい、とこの場にいる皆が思った事だろう。いや、この僕を抱き上げている土居とかいう男は思わなかったみたいだ。

「いえいえ、この子は私の子じゃありませんよ。どうやら迷子みた

いで、廊下をうるついでいました」

だから迷子じゃねーって！！ しかもうるついでたワケじゃねー
つつの！！

……村田氏よ、堪えようとして口の隙間から空気が漏れておる
ぞ。

「館内放送で親を呼んでもらえますか？」

あ、向こうにいた人達が壁を叩きだした。我慢が限界に達したよ
うだ。まあ僕を抱き上げてる男はいまだに気付いていないのだが。

「ああ、名前を訊いていなかったね。君の名前は何ていうのかな？」
……そろそろ誰か止めてくれよ。っていつかこの場で止められ
るの村田氏しかいないだろ。

と目で村田氏に訴えると、向こうもやっとなんか止める気になったらし
い。

「土居君、その子は迷子じゃないよ。今朝早くに通達があったはず
なんだが……」

「通達と言いますと、超能力者のパートナーの件ですか？」

「そう。昨日入ったばかりでまだ知らない事はたくさんあるからね。
ベテランである君が色々教えてあげてほしいんだ」

「分かりました。それでそのパートナーはどこに？」

「そこ」

「は？」

村田氏が指し示したのは勿論僕。迷子だと思っていた子供がパー
トナーだと聞かされて、ポカンと間抜け面になる土居氏。

僕は不機嫌さを隠さずに、村田氏を睨んだ。

「もつと早く止めてほしかったんですけど？」

声が刺々しくなるのも無理ないよね？ っつか向こうにいる人達、
いつまで笑ってたんだ。もうお腹抱えて声をあげて笑ってやがります
よ、ケツ。

「すまなかった。笑いを抑えるのに必死でね。まさか迷子に間違わ
れるとは・・・クケツ」

・・・能力で記憶を消すとか出来るんだらうか？

そんな不穏な事を考えている事に気付いたのか、村田氏が咳払い。

「そんな事より、互いに自己紹介をしてくれるか？ もう仲良くな
ってるようだし」

・・・やっぱり消してやる。

頭の隅で決意しつつ、僕は土居氏に向き直・・・ろうとしていま
だ抱き上げられている事に気付いた。

「・・・下ろしてもらえますか」

「あ、ああ」

慌てて僕を下ろす土居氏。一応悪気はなかったんだらうし、この

人は許してあげよう。

「僕は進堂歩夢といいます。中学二年生です」

手を差し出すとすぐに握手してくれる。僕が超能力者だと知っていても躊躇わずに握手してくれた彼に好感を持った。

「土居利通としみちです。先程は失礼をいたしました」

そう言っ頭を下げる彼。何故に敬語？

首を傾げると村田氏が教えてくれた。

「土居君は警部だからね。一応歩夢君の方が上司、という事になる」

ああ、そう言えば警視とほぼ同じ権限が与えられる、って言うってたっけ。

「でも僕は年下で、経験も何もないですから、敬語は使わなくて良いです」

「そういうわけには・・・」

「子供に敬語を使っていたら、何も知らない人から見たら変に思われますよ」

僕がそう言つと、土居氏は分かったと頷いてくれた。

一回り以上も年上の人から敬語で話されるのってちょっと気持ち悪いしな。

互いに紹介が終わると、僕と土居氏は村田氏に向き直る。

村田氏はよし、と頷くと僕に小さな箱を差し出した。

開けると中には警察手帳と警棒（僕が持っていた物より丈夫な奴）、サイキックリングが入っていた。昨日の今日でよく準備できたな。

「サイキックリングは君しか外せないように調整してある。超能力がない人に付けても効果はないから、ずっと持っているといい」
「ありがとうございます」

手帳はポケットへ。警棒とリングは一緒に入っていたベルトに繋ぐ。このベルト、腰に装着して服を着ると外からは見えなくなる。動きを阻害する事もないし、結構便利なベルトだ。

「早速仕事にかかってもらうよ。経験を積むのは大事だしね。詳しい事は土居君から聞いてくれ」
「はい」

村田氏に軽く敬礼され、土居氏はピシッと綺麗な敬礼を、僕はぎこちない（見よう見まねだからな）敬礼を返す。

土居氏の案内で、僕は駐車場に向かうべく部屋を出た。

・・・笑い過ぎてグッタリしている人達を睨みながら。

捜査とコミュニケーション・・・(前書き)

短いです。

捜査とツーショットと・・・

一言で言うと、普通でした。

いや、目の前の状況がね。土居氏が運転している車はパトカーではなく普通の乗用車。土居氏も制服から私服に着替えているので、普通の優しそうなおじさんだ（あれ？ あんまり変わってなくない？）。

僕は着替える必要はないのでそのままだ。

何でも、いかにも警官です！ なんて格好でいると、少し警戒されてしまうらしい。僕を連れているから、親子だと思われるだろうな。

色々と考え込んでいると、土居氏は視線を前方に向けたまま声をかけてきた。

「難しい顔をしているけど、どうかしたかい？」

「あ、いえ、別に・・・」

「遠慮しなくて良いよ。私達はパートナーだからね」

互いによく知っている方が動きやすい、と言われて、じゃあお言葉に甘えましょう。

「土居さんは超能力者じゃないですよ？ 超能力者のパートナーって普通は同じ超能力者になるもんじゃないんですか？」

「ああ、確かに超能力者同士ならすぐに分かりあえるかもしれないね。でもそれだと私達能力を持たない者との間に隙間が生じやすく

なってしまう。お互いに協力し合っていく事がこの組織の存在理由なのに、それじゃあ元も子もないだろう？ 力があるからとか関係なしに信頼関係を築いていく。それが村田さんの目的だね」

なるほど。村田氏らしい。と感心していると。

「私は君のような可愛い子のパートナーになれた事を嬉しく思うけどね」

思わずズッコケた。まあシートベルトしてるから前のめりになっただけだケド。

「か、可愛い・・・子・・・？」

口元を引き攣らせながら土居氏を見上げると、本当に嬉しそうに笑ってやがりました。

「娘が可愛い物好きでね。その影響か、私も可愛い物を見ると嬉しくなるんだよ。あ、後でカメラを撮っていいかい？ デジカメを持ち歩いているんだ。娘に見せてやりたくてね」

土居氏、親バカ決定。

車を近くの駐車場に止め、僕達はある公園の近くに来ていた。そこは車一台がやっと通れそうなほど狭い道で、僕が通う学校からも近い。

「一週間ほど前、ある少女が公園で遺体として発見された。彼女は暴行を受けた後、頭を殴られて殺されている。年齢は十五歳。その四日後、また少女が公園で襲われた。彼女は重傷を負っていたもの

の一命は取り留めている。年齢は十三歳。彼女の証言で犯人はこの道で少女達を襲い、公園に連れ込んで暴行に及んだらしい事が分かっている。覆面をしていた為に顔は分からないそうだ。服装は黒のシャツにジーパン、中肉中背ぐらいの男だとあるが・・・」

土居氏の説明に、僕はテレビで見たニュースを思い出していた。

今朝、朝食をとっている時（例によってサンドイッチ）父がニュースを見ていたので、何とはなしに見ていたのだ。内容は土居氏が語った事とほぼ同じ。ただ二人の少女は僕と年が近い上に、二人目の少女は学校が同じだった為に、よく覚えていた。

彼女達の事を思っただ顔を顰めていると、土居氏はハツとしたように口を閉じた。

「すまない。いきなり経験のない君にこんな話をしてしまって・・・」

「いえ、仕事なんですから、ちゃんと向き合って行かないと」

そう言つと、土居氏が感心したように眉を上げる。

「大人でもなかなか割り切れないものだが、君は落ち着いているね」「そうでもないですよ。まだ実感が湧かないだけです」

僕はまだ子供だという自覚はある（そこ！ ホントにあるのか、とか言わない！）。だから大人の話にはついていけないだろうし、ニュースを見ても他人事として捉えてしまう。落ち着いているのではなく、理解していない、と言った方が正確だろう。まあ、この辺は父さんの受け売りだけだな（父さんの仕事は編集長。その前は何かと戦場カメラマンだった）。

「それで、他に手掛かりとかなかったんですか？」

「犯人の血液型はA型だと分かっているが、それ以外はまだ何も分かっていない」

あれか、セーエキを調べたってやつか。なんかR15とか指定されそうな話だよな。

などと考えていると。

「歩夢君？」

愛らしい声が僕の耳に届いた。この声は！

「麗華ちゃん？」

振り向くとやはり我が校のアイドル麗華ちゃん。今日は私服なのでいつもより可愛さ二割増な気がするぜ！

「こんなところでどうしたの？」

いや、訊かれても答えにくいなあ。まさか先程の話をして怖がらせるのもなあ……。

「可愛いねえ。お友達かい？」

土居氏よ、フォローは嬉しいがそこは恋人と言ってもらえんだろ
うか……。無理ですかそーですか。

「あ、あの……鈴原と申します……」

土居氏が誰か分からないので少し人見知りの麗華ちゃん。かわええ。

「こんにちは、土居です。一応警官だよ。見えないかもしれないけど」

言いながら警察手帳を見せる土居氏。自分から言うとは、気にしているのか、警官らしくないと。

「あ、ハイ。よろしくお願いします・・・」

警官だと知ってちょっとホツとした様子の麗華ちゃん。この反応、もしかして事件の事を知ってるのか？

「麗華ちゃんは一人で何してたの？」

「お買い物。お母さんに頼まれちゃって」

砂糖を買いに行くの、と苦笑。どうやら知らないようだ。知ってたら一人でこんなところ歩かないよな。

「もし急ぐのでなければ、写真を撮らせてもらえないかい？ 娘が可愛い物が好きでね。できればツーショットで」

土居氏、グツジョブ！

心の中でサムズアップです。

戸惑いながらも応じてくれた麗華ちゃんに感謝！！でも土居氏の次の言葉にあえなく撃沈。

「やっぱり可愛い女の子が二人もいると華やかだねえ」

「おいしいiiiiiiii!!」

「僕は男だっつーの!!」

その後は土居氏の謝罪を受け入れるまでかなりの時間を要しました。。。

デジカメと『それ』と・・・(前書き)

長い気がするのは気のせいでしょうか・・・

デジカメと『それ』と・・・

プリントしたら写真を貰う約束をして、何とか許しました。土居氏に悪気はないハズだからね・・・。

麗華ちゃんはクスクスと笑いながら行ってしまった。襲われたら危ないと思って一緒に行こうかと言っただけで断られてしまったので、仕方なく周辺を見回る。

「警察が辺り一帯を調べ尽くしたんだよね。それでも手がかりなしかあ・・・」

「この辺りは人通りが少ないから、目撃者がいないんだよ。犯人はそれを知っていて罪を犯してるんだろう」

何とも厄介な犯人だな・・・。

などと溜息を吐いていると。

「キャ・・・ッ」

微かに・・・本当に微かに悲鳴のようなものが聞こえた。それは麗華ちゃんが歩いていった方角で・・・。

僕は血の気が引く思いで駆けだした。

「お、おい！ どうしたんだ!？」

土居氏が後を追いかけてくる。

「悲鳴が聞こえた！」

「何！？ 私には聞こえなかったが・・・」

土居氏には聞こえなかった？ ならなぜ僕には聞こえたんだろう・・・。アレか、能力のおかげか。

だが今はそんな事を考えている時ではない。麗華ちゃんの無事を祈りながら角を曲がると。

「麗華ちゃん！！」

そこには麗華ちゃんの口を手で押さえつけ、羽交い絞めにしている覆面の男が。

僕の声にパツと顔を上げた覆面が、後ろから追いかけていた土居氏に気付いて逃げだした。突き飛ばされるように解放された麗華ちゃんは力が抜けたようにへなへたと座り込む。

「大丈夫？」

土居氏が犯人を追いかけていたので、僕は麗華ちゃんの傍にいる事にする。

「だ、だいじょぶ・・・」

口ではそう言いながらも震えが止まらない様子の麗華ちゃん。僕は思わず彼女の肩を抱き寄せ、背中を優しく叩く。

いつもの僕なら恥ずかしくてこんな事は出来なかっただろうけど、こんなに怯えている麗華ちゃんを放ってはおけない。彼女が抵抗せ

ず身を任せている事もある、と思う。

やがて五分くらいして、土居氏が戻ってきた。

「逃げ足が速くて、姿を見失ってしまった・・・」

この辺りは細い路地が多くあって、土地勘がある人間なら逃げお
おせてしまつ。

土居氏は僕と麗華ちゃんに「すまない」と謝ってきた。

「い、いえ、あたしは大丈夫ですから」

その頃にはもう震えが止まっていた麗華ちゃんは、頬を赤くしな
がら首を横に振った。

「家まで送るよ。買い物はまた今度にした方が良い」

それでも買い物に行く、何て言われたら心配のあまりストーカー
するかも、と続けたら麗華ちゃんがやつと笑ってくれた。

「歩夢君がストーカーなら逆に嬉しいかもね」

ナヌ？ それはどついう意味デスカ？

だが麗華ちゃんは何も言わずに、頬を赤くしたまま僕達に家まで
送られたのです。何故に？

その後再び現場に戻ってきた僕と土居氏。犯人の手掛かりもなく、逃げ足が速いということぐらいしか分からない。

「どこに行ったのか・・・」

「応援は頼めないの？」

「もう連絡はしてある。だが顔も分からず、服装も変えていれば人数を集めたところで見つからない。地道に目撃者を探す事になるだろうね」

「そっか・・・」

ウーン・・・と唸っていると、土居氏がジッとこつちを見詰めてきたので、ん？ と首を傾げる。

「いや、敬語じゃなくなっただなあって・・・」

あれ？ いつの間に？

「すみません、さっきの事で動揺してるのかも」

「無理もない。それに敬語はいらさないよ。一応は上司だし？」

微妙な雰囲気吹き飛ばそうとワザとふざけるように言ってくれる土居氏。その心遣いに感謝！ ただ肩を竦める仕種が上手だとは言っておく。

「ホントどこに行ったんだろ、犯人。どうせなら監視カメラでもあれば・・・」

こんな場所にあるわけないんだケドね、などと呟いていると。パツと頭に浮かんだアイデアが！

「あ！」
「何だ？」

思わず叫んでしまい、土居氏が眼を丸くする。う、恥ずかしい……。

「えっと、僕的能力使えるかなあ、と思って……」
「能力？ 確か『夢現』だったか？」
「うん。ただの思いつきで終わるかもだけど……土居さん、デジカメラ貸して？」

上目遣いで強請^{ねた}るように……って僕が意識してやったんじゃないよ！ だって土居氏が高いんだもん！ 勝手に上目遣いになっちゃうんだもん！ 何で僕の周りは身長が高い奴ばかり集まるんだ！

などと心の中でシャウトしながらデジカメラを受け取る。こころなしか土居氏の顔が赤く見える……。首を傾げたのがマズかったか？ そんな事は置いといて、僕はデジカメを麗華ちゃんが襲われている場所へ向けた。パシャッと一枚。画面に何の変哲もない道が映される。

「それをどうするんだい？」

土居氏に訊かれるが、まだ出来るか分からないので、黙。

僕は両手でカメラを持つと、巻き戻しのイメージを思い描きながら息をゆっくりと吐いた。すると、

キュルキュル・・・

やった！ 成功した！

カメラの画面に映っていた画像が、まるでビデオを巻き戻すかのように巻き戻っていく。後ろ向きで歩いてくる僕、麗華ちゃん、土居氏。家まで送っていくと歩き出した時だろう。そして地面に座り込む麗華ちゃんと慰める僕。犯人を追いかける土居氏。麗華ちゃんを襲っている犯人。全てが後ろ向きで動いていく。

僕はそこで力を止め、カメラを元の状態（何の変哲もない道の画像）へ戻した。

「いやはや、凄いねえ・・・」

ずっとカメラを凝視していた土居氏が呆然とした様子で呟く。僕自信こんなにもうまくいくとは思っていなかったから驚いたよ。

とにかく、これを使って犯人を探そう。先程の画像で犯人がどこから来たのかが分かったので、そっちを向いてパシヤ。再び能力を使って巻き戻し。それによって犯人が潜んでいた場所を特定。そこをデジカメに収め、三度能力みたひを使うと・・・。

「お」

土居氏が驚きの声を上げる。

そこには覆面をかぶろうとする男の姿が映っていたのだ。

「これで犯人の顔が分かったな。後はこいつの住所、分かるか？」

「時間はかかるケド、多分分かる」

「頼んだ」

「うん！」

頼まれた事が嬉しくて、張り切って返事をしてしまう僕。だって新人初日で能力も把握したのが昨日だっていう、ほぼ役立たず決定な状況だったんだよ？ 頼りにされるのって、すっごい嬉しいんだ！

などとうきうきしながらも手は動かす僕。巻き戻しては犯人が動く方向へパシヤ。そして巻き戻し。その繰り返しだ。時間はかかるが、徐々に犯人のもとへ近付いているのが分かる。

やがて一軒のアパートに辿り着いた。頭にボロ、と付けなくなるほどの古さだ。

そのアパートの一階、奥から二番目のドアに男が入っていくのをカメラの画像が映し出していた（出ていく場面なので、後ろ向きでは入っていく画像になる）。

「あそこか」

「そーみたい」

僕達は少し離れた所からアパートを見ていた。私服だし子連れに見えるので警官だと気付かれる心配はない。だが犯人は僕達の姿を見ているので、あまり近くまでは行けなかった。

「村田さんに連絡して監視する。今アパートの中にいるかどうかまでは分からないから、応援が来るまでここで見張ろう」

「うん」

おお〜！ ホントに僕、警察なんだなあ。などと今更実感。だって本来なら能力なしで探すのが警察でしょ？ 能力使ってる時は必死だったケド、やっぱそれはフツーじゃないし。こういう見張るっていう行為が、ちょっと懂れてたというか・・・ハイ、子供です。

ちなみに村田氏に能力の事を言ったら「凄い便利な能力だなあ。これからの捜査は楽になりそうだ」とほざいてました。僕に全部任せるとは思わないだろうな！

それから応援が来るまで、僕は土居氏にコツやらなんやらを教わりましたとさ。

ただいま秘密組織（本来の名称、長いからこっちで定着）の食堂（何気に充実してます）でお食事中。だって応援の人達が来てここに帰ってきた時はもう夕方だったんだぜ。お昼抜きで頑張ってたから、お腹ぺこぺこだ〜！ ってか食堂がある事に驚いたんだケド、例によって村田氏の希望だったり。あの人ホント何者？

ラーメンをズルズルとすすっていると、前の席に誰かが腰掛けた。

ん？ と見上げると、稔と命音（こう呼ばないと怒る・・・）がニマニマ笑いながらこっちを見ていた。気持ち悪いって・・・。

「凄いね。初日から大活躍だなんて」

「うんうん。さっすがアタシのお気に入り！ これからも期待しちやうからサ」

・・・スイマセン、二人の愛が重いです・・・。

食欲がどっかに吹っ飛んでいくのが感じられた。でもせっかくの美味しいラーメンを残すわけにはいかないと胃に流し込む。

「でもサ、何で男が部屋に戻ってきた時に踏み込まなかったの？

アタシなら特攻かけてふん捕まえてやるのにサ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

僕と稔の溜息が重なる。

「あのですね、男の顔も住所も超能力で分かった事なんですよ。それじゃ証拠にならないし、無理に踏み込んで何も見つからなかったらこっちがやばいんです」

「証拠なんてすぐに見つかるでしょ？ 覆面とか」

稔がやれやれ、と言いたげに説明しても命音は首を傾げるだけ。

オイオイ、僕にも分かる事が何で分からないんだ。

「似たような物なんてどこにでもあるよ。言い逃れなんていくらでもできるでしょう？ 本当に言い逃れが出来ない、犯人だっていう証拠がないと。まあその前に家宅搜索の令状がとれるか、って話なんだケドね」

僕が言うと、命音だけでなく稔まで驚いた顔をしていた。オイ。

「アユミン、アタシより物知り！」

「うん。命音より頭が良いね」

・・・褒められてる気がしない。つてか稔よ、命音が年上だつて分かつてるのか？

食べ終わった僕は食後のお茶（勿論玄米茶）をズズ・・・と飲む。前方のお二人は何も持っていないので、僕と話をするためにここに来たようだ。

「村田さんも褒めてたよ。命音以上に役に立つ人材が来てくれて嬉しうって」

・・・ここでの命音の立場って・・・。

聞けば命音はサポートよりも特攻が得意なんだそうだ。

・・・一応、ここって捜査が主のハズだよねえ？

お茶も飲み終わったので、食器を返却口に返して帰り支度。と言つても荷物なんてそんなにないケドね。

ちなみに僕達三人には個室が用意されてたりします。自宅の僕の部屋ぐらいの広さ。ビックリだよ、うん。これでいつ家出しても大丈夫だな。・・・する気はナイヨ？

「稔、命音。僕はもう帰るケド、何か用事あった？」

「いや・・・ああ、一つ言っておく事があった。歩夢君の能力はコントロールが完璧なようだから、訓練は必要ないって。夢の中で練習してたのが良かったみたいだよ」

「ホント凄いやね。おまけに警棒握らせたら日本一！ だしサ」

いや、日本一ってなに・・・。

命音が口を開くとツツコミしか返せないような気がするのはいか。いや、気のせいじゃねーナ（反語）。

「じゃあまた明日」

明日からはまた学校だ。だからここに来るのは学校が終わってからになる。村田氏は用事がある時は連絡するから毎日は来なくていい、と言っていたが、まだ新人で覚えなければいけない事がたくさんある僕はやっぱり来た方が良くと思うのだ。ここには資料室もあるので、勉強するのもってこいだし。

二人はここで暮らしているらしいので、来れば会えるだろ。

「また明日」

「また明日」

二人の声を背中に、僕は食堂を出た。

家に返ると父さんも母さんも嬉しそうに抱きついてきた（父さんは撃退したケド）。どうやら村田氏から今日の事を聞いたらしい。あの人、ワザワザ連絡したワケか。マメだなあ。

パーティーを開きそうな勢いだったので、夕飯は軽くでいいと断った（ラーメン食べたしな）。それにより落ち込んだ両親だが、すぐに復活して和気藹々としていた。ホント変わった両親だよな……。ってか僕の周りには変な人だらけだからしょうがないか（これでも良い意味で言っている）。

夕飯食べて風呂入って寝る。

今日は色々あったせいかな能力を使いまくったせいかな、とても疲れた。いつもならゲームをするところだが、早々とベッドに入る事にした。そしてすぐに訪れる夢。僕の思い通りにできる空間へとやってきた。

「訓練は必要ないって言ってたケド、さすがに夢の中では練習しないとネ」

今回は剣の扱いというより、警棒の扱いを練習しようと思う。握ればきちんと扱う事は出来るが、切るのと殴るのでは少し違ってくるからな。

練習場所は前と同じ体育館。ここの方が練習しやすいような気がする。

というワケで、僕は一心不乱に警棒を振りまわしていました。だけれどしばらくして

「ん？」

違和感を感じた。前にも感じたのと同じ感覚。だが前より大きい。

「あれか・・・？」

ふと気付くと扉の前あたりに『それ』があった。『それ』はまるで湯気のようにユラユラと揺れている。空間が歪んでいると言った方が良いかな。向こうが透けて見えているから、『物』でないのは

分かった。とにかくワケが分からないもの。

今までなかった事なので、僕は呆然としながらもそれに近付いた。

『……こ……が……か……』

すると人の声のようなものが聞こえてきた。だがそれはまるで電波の悪いラジオのように、途切れ途切れにしか聞こえなかった。

もっとよく聞こうと近付いて……僕はそこで目が覚めてしまった。

「何だったんだ？ あれ……」

ベッドの上でボソリと呟く僕。だが答えは出そうになかった。

下校と囿（偶発）と・・・（前書き）

暴力・・・になるんでしょうかね？

下校と囿（偶発）と・・・

学校に登校すると、変人が声をかけてきた。勿論母さんの事だ。

変人の口からは母さん以外の話をあまり聞かない気がするぞ。大丈夫なのか？ まあ三日前の事を蒸し返されただけマシだが。

自分の席につくと、こっちを見ていた麗華ちゃんと目が合った。何か言いたげで、どうしたの、とばかりに首を傾げると、近付いてきて「昨日はありがとう」と言ってきた。

「いえいえ。もう大丈夫？」

「うん。お母さんがしばらくは一人でいちゃ駄目って」

「だろうね。帰りも気をつけなきゃダメだよ？」

「うん。その事なんだけどね・・・」

言いながら少し恥ずかしそうにもじもじした麗華ちゃん。何これ、可愛過ぎるう〜。

「一緒に・・・帰ってもらっていい？」

キターー！！ 一緒に下校！！ フラグだった？ たったよね！？

（ただいま混乱中）

「勿論！ 僕でよければ」

小さな声で返すと、麗華ちゃんは嬉しそうに笑った。やっぱり良いなあ、麗華ちゃん笑顔。これ見る為なら何でもできそうだな〜。犯罪は勘弁だケド。

麗華ちゃんが自分の席に戻ると同時に、やはりというか、隣から刺すような視線。またこれが無視できないほどに突き刺さってくるから、僕は仕方なく変人の方へ向き直った。

「何が言いたいの」

「オトモダチ脱出か？」

変人がのたまったので、僕は頭に警棒を叩きつけてやった（治ったばかりのタンコブが再びできたのは良い思い出）。

待ちに待った放課後！ 麗華ちゃんと一緒に下校だぜ！

ただいまテンションだだ上がり中。また覆面男が襲ってきたら警棒のさびにしてくれるわ。

などと心の中で叫びながら、表面上では静かに麗華ちゃんとお話中です。他愛ない話だケド、会話できるだけで嬉しいのさ！

やがて昨日麗華ちゃんが襲われた道に差し掛かる。やはり麗華ちゃんは少しびくびくしながら歩いている。

「昨日一緒にいた刑事さんが見張ってるハズだから、大丈夫だよ」
「うん。ごめんね、付き合わせちゃって」

「良いの良いの。怖いなら毎日付き合っからさ」
「ありがとう。友達はみんな違う方向だから一緒に帰れなくて」
「どういたしまして」

かく言う僕も家は反対方向。でもそんな事気にしな〜い。

昨日に続いてまたやってきた麗華ちゃんの自宅は僕ん家ちよりでかい。もう豪邸だよネ！　って言いたくなるでかさダヨ。

聞けば麗華ちゃん、なんと社長令嬢だったんデス！　アレだネ、天は二物を与えず、って嘘じゃね？　ってな状況だよ〜。顔よし、性格よし、成績よしの上にお金持ち。いや〜これでもかかっていうくらい逆玉優良株だネ。いや、逆玉狙ってるワケじゃないケド。

「それじゃ、また明日」

「あ、うん、ありがとう。また明日」

満面の笑顔で手を振る姿はホント可愛いよ、うん。この前麗華ちゃんに自分より綺麗だとか美人だとか言われた事はもうすっかり忘れず。クシャクシャ丸めてポイします、ポイ。

上機嫌で歩いていた僕は、昨日の道に差し掛かっていたが全く恐れていなかった。だから公園を通る方が近道だからとそつちに足を向けてしまったのだ。僕の外見が美少女（！）に見える事をすっかり忘れて。後から考えてみれば安心してたんだろ〜うねえ。覆面男には見張りがついているハズだって。

「フンフンフン」

鼻歌まで歌いながら公園内を歩く僕。このまま突っ切れば近道近道

「フーン・・・むぐう!？」

背後で気配を感じた、と思った時には遅かった。突然口を押さえられて、大声を上げられなくなった。そのまま身体を抱え上げられ、抵抗できない僕は公園の茂みの中へ強引に連れて行かれる。後から気付いたんだケド、ここは死角になっていて他からは見えないんだよ。過去二人の少女もここで暴行を受けたんだろーね。

地面に押し倒され、両腕を頭上で抑え込まれ、ついでに体重をかけて抑え込まれて身動きとれなくなった。口には布まで突っ込まれたよ、おえ。

見上げると昨日と同じ覆面男が荒い息で僕を見下ろしていた。その手が僕の胸辺りを弄り出す。気持ち悪うううううう!!

「・・・胸がない」

上からポツリと眩きが。当り前だろ！ 僕は男だつっーの！ 学校の制服だつてズボンだろうがよ！

勿論口は塞がれているので「ん〜！ ん〜！」としか聞こえてないだろうが。

そのままシャツのボタンを外そうとする手を払い落したくて。能力を使ってやろうか、と思った瞬間、突然身体が軽くなった。同時に目の前の男の姿が消える。ほえ？

口の布を取り去り、辺りを見回すと、なんと土居氏が覆面男を押さえつけてました。僕が能力使ったワケじゃなかったから何事かと思つたケド、土居氏が男を殴り飛ばしてくれたらしい。腕を捻り上

げられている男は苦悶の表情を浮かべている。痛そうだがケド、ザマ
ーミロ！

新たに二人の警官がやってきて、土居氏の代わりに手錠をかけて
連れて行った。それを見ていた僕は、心配そうにこつちを見る土居
氏に手を振る。

「怪我はないか？」

「大丈夫。土居さんこそ怪我ない？」

「私も大丈夫だよ。でもビックリしたよ。現行犯逮捕を狙っていた
とはいえ、歩夢君が襲われるなんてね」

「・・・僕もビックリです」

ホントビックリだよ。あの男、マジでコロシてやるつか・・・。

土居氏は僕の服についた土を払って立ち上がらせてくれる。

「村田さんに報告しないとね」

礼を言おうとしていた僕はその土居氏の言葉にピキリ、と固まっ
た。何故って？ 今回の事を笑われるに決まってるからだろ！ 特
に稔！ あいつ絶対に笑う！ すっげえ良い笑顔で笑いやがる！
くそ〜！ やっぱ覆面男コロス！

多少落ち込みながら、土居氏と一緒に村田氏に報告。そして僕の
想像通り、村田氏は良い笑顔でサムズアップしやがりました。だか
ら僕は親指を逆さに立てて勢いよく下におろしました・・・大爆笑
されました。

余談。何と村田氏は僕の両親にまで連絡してやがりました。稔に

笑われたのは想像していたケド、さすがにここまでとは思いつきませんでした。心配してギョウギョウ抱き付かれながら、僕は一つ決意していた。・・・村田氏、半殺しの刑だな。

能力をフルに使って村田氏をボッコボコにした数日後。僕は夢を見た。

ん？ 村田氏は大丈夫なのかって？ 大丈夫だよ。警棒を握って迫る僕に、むしろ嬉々として村田氏を差し出した先輩方がサムズアップで見送ってくれたから。村田氏は仕事が出来ると優しくはあるんだケド、悪戯好きなのが玉に傷なんだなあ。少しは懲りろ、的を見送りだつたヨ。

ああ、夢の話だつたっけ。前に夢の中で感じた違和感。アレがまた現れたんだ。しかも前回よりも大きくなって。黒い影みたいなのが見えるようになって、でも相変わらず透けたままで。聞こえてくる声も少しハッキリしてきたかな。でもまだうまく聞き取れない。

「この・・・き・・・る・・・」

「何？ 何が言いたいのか？」

影に向かって声をかけてみるが、反応はない。近付いてみようかと思っただが、前回みたいに目が覚めてしまいそうでは出来なかった。

最初の頃は誰かに相談しようかと思っただが、別に悪意を感じるワケでもなく、嫌な感じもしないのでやめた。何故か誰にも言わない方が良さそうな気がしたのだ。

なので少し離れた所からジッと観察。そこから感じるのは、焦りと苛立ち、そして・・・親しみ。

親しみ？ 何じゃそら？

ワケ分からん、と首を傾げていると、目が覚める前兆である景色の揺らぎが。

「ホント何なんだよ？」

そんな眩きが口から零れると同時に、僕の意識は覚醒していった。

身体強化と鬼ごっこ・・・

それからは夢に影が出る事もなく、現実でも捜査に協力してそれなりに役立つ日々だ。一週間もすれば顔見知りも増え、歩けば挨拶を交わせるほどここに慣れてきた。

ボッコボコにした村田氏と言えば、初めの頃は大人しくしていたようだが、最近はまだ悪戯心が騒ぎ出していると助手（秘書と言った方が良いか）が漏らしていた。エスカレーターするようならまた半殺しの刑にしますよ、と言うと、本気の目でお願ひします、と返されてしまった。一応冗談のつもりだったんだケド・・・。

「歩夢君」

噂の当人が声をかけてきた。少しビクついているような気がするが気のせいだ、うん。助手の人もそう言うてたし。

「何ですか？」

「大事な話があるから、私の部屋に来てくれるかい？」

僕達が今いるのは食堂。今日は学校が休みだったので、母さんに朝食はいらなからと言ってここで食事をしていたので。土居氏に誘われたからだが、娘さんはどうしたのかと問うと、妻が子供を連れて里帰り中なのだそう。すわ、別居か離婚か！ と思ったら何と二人目を妊娠中なのだそう。予定日までまだ時間はあるそうだが、家の事が出来ないほど忙しい土居というよりは実家にいた方が便利だろうという事らしい。一人目の子はなかなか出来ない中やっとな生まれた娘なので、甘やかし過ぎて我儘に育っている。だからせめて二人目は少し厳しくするつもりだ、と親バカ丸出しの顔でのる

けてらっしゃいましたよ、だらしない顔してまあ。微笑ましい光景である。

それはさておき、僕は村田氏の後について部屋に向かった。村田氏の部屋、とはあの秘密基地の扉の部屋だ。いい加減あの趣味やめるよ、と思わないでもないが、周りの人間から耳にタコが出来るくらい言われているらしいので、黙。

中には稔と命音もいて、僕の姿を見ると手を振ってきた。やつほ

「さて、大事な話と言つのはね。また超能力者を見つけたという話なんだ」

驚いたのは僕と命音。見つけたのは例によって稔だろうし、まあそうだろう。

「アユミンが見つかったからそんなに経ってないよネ。年に一人見つかれば良い方なのにサ」

そう。超能力を持っている人はそれを隠すか、気付かないままが多い。ただでさえ超能力者が少ないのに、探そうと思えばなかなか見つからないのは道理である。

「それで、見つけたんなら交渉はミノルンの仕事でしょ？ 何でアタシ達まで呼ばれたのサ？」

「ここが定位置、と言いたげに僕の背中に凭れかかってくる命音。いや、だから胸が思いっきり当たってますって。

「厄介な人物なんですよ。俺一人では無理っぽくて」

稔がそんな事を言うなんて、と思わず見上げると、本当に困った様子で微笑んでいた。

相手の人、そんなに厄介なのか。ちょっと見てみたい気がするな。味方にしたら稔に対抗できそうだ、ニヤリ。

「ふーん、まあ良いけど。でもアタシそういう交渉事って苦手なんだけどサ？」

「ああ、勿論期待はしてないから大丈夫ですよ」

「そっかー」

・・・おい、バカにされてますよ、命音サン。稔も分かってて言うてるな、オイ。

「そういうわけだから、三人で行ってくれ。頼んだぞ」

村田氏よ、あんたも止めようよ。ここの責任者だろうが。

目で訴えてみるが、華麗にスルーされちゃったヨ。

「んじゃ行こっかー！」

元気に歩き出す命音。勿論僕も引きずられる形で歩かされていますがネ。

毎度の事ながら、二人についていけるのかと不安になる僕でした・・・もうソロでいんじゃね？

稔の案内のもと、やってきたのは大きなゲームセンター。休みだから凄い数の人で溢れ返っている。

その中を、僕達はズンズン進んだ。向かった先にはガンシューティングゲーム。三台ほど並んだうちの一つで、高校生くらいの男子が余裕の顔でプレイしていた。腕前はなかなかのもので、出てくる敵を次々と打ち倒している。

「齋藤強司さん」

周りの騒音に負けないように、稔が声を張り上げた。呼ばれた男子はいかにも不機嫌そうに振り返る。

その視線は稔をスルーし、後ろで控えていた僕と命音に平等に向けられた。特に僕は顔を、命音は胸を。

目が合った途端、僕は思わず命音の後ろに隠れた。それだけ視線の熱が半端じゃなかった事もあるが、鋭すぎる三白眼がとても怖かった。いかにも不良！ という雰囲気醸し出して、仕事じゃなければ声など掛けたくも掛けられたくもない相手だ。

僕が怯えたように顔だけ覗かせているのを見て、不良男は舌なめずりせんばかりにニヤリと笑った。こわっ！ 肉食獣がここにいる！

ビビってしまった僕だけど、この反応で相手が女好きだと確信した。

・・・自信ないけど。

「良い女二人も侍らせて、良いご身分だなあ、オイ」

・・・やっぱり僕は『女』なのネ・・・。

不良男は稔をぎろりと睨みながら（というか目が鋭過ぎて普通にしても睨んでるように見える）、口元に嘲るような笑みを浮かべた。器用ですネー。

「あなたに大事な話があるんです。少しばかりお時間をいただけませんか？」

おお、全然動じてない。さっすが稔！ 交渉役の名はダテじゃない！

「あ？ 何で付き合わなきゃいけないんだよ。どうせなら女置いて失せな。男に興味ねー」

ハッキリ言う人だなあ。露骨過ぎて鳥肌立ってます。

「そういうわけにはいきません。話をするのは俺の役目なので」

いつも微笑みを浮かべている稔だが、さすがに今は無表情になっている。こ、こっちもこわー。

「ったく。ウゼエ。ならオレの気晴らしに付き合ってもらっせ」「気晴らし？」

「ああ。簡単だぜ。鬼ごっこするだけだ」

鬼ごっこ？ 小さい時によく遊んだ、アレか？

「お前が鬼だ。オレは逃げる。一時間経ってもオレを捕まえられなければオレの勝ち。その女達は置いていってもらうぜ」

余裕^{あゆじやく}_{じやく}々^くなのは勝ちを確信しているからか？ うう、キモイ。

「もし俺が勝った時は、話を聞いてくれるんですね」

「ああ、何でも聞いてやるよ。すぐに始めようぜ」

「その前に一つ。鬼役は後ろの二人にもお願いしたいのですが」

「ああ？ 女に頼るとは軟弱なヤローだな。まあ良い。好きにしろ」
「ありがとうございます」

そして不良男の言う鬼ごっこが始まった。

範囲はゲームセンター内、制限時間は一時間。現在時間は十一時なので、十二時に終わる予定だ。

斎藤は始まりの宣言と同時に、凄い高さを跳躍して僕達を飛び越え、逃げた。僕達は呆気にとられて一瞬あいつの姿を見失う。

「あの能力、恐らく身体強化ですね」

身体強化？ と首を傾げると、稔は苦笑混じりに続けた。

「文字通り、肉体の力を強化する能力だよ。腕力や脚力だけでなく、治癒力も上がるとか」

稔がそこまで詳しいのは同じような能力を持った超能力者が過去

にいたという事だ。なら攻略の仕方もあるかな？

「触れなければ被害に遭う事はないですね。しかも今回は鬼ごっこという事で向こうは逃げるだけ。さっさと捕まえましょう」

僕と命音は頷いた。勿論これらの会話をしている間もあの不良男を追いかけて走ってます。

凄い人だからだからなかなか追いつけないケド、稔のテレパシーで場所は丸分かりだ。

だが一つ疑問に思ったのは、斎藤が普通の人間にはできない動きをしているというのに、周りの客達は何とも思っていないという事だ。まるでいつもの事だ、と言わんばかりにスルーしている。中には賭け事のようなものをしている者もいる。

その辺を稔に訊いてみたケド、さすがに分らないらしい。これは本人に訊くしかないな。

稔が念力で斎藤の動きを止めた。だが身体強化にモノを言わせて自力で抜け出してしまう。ちょっとスゲー。

何でも斎藤の能力の強さは『強』に当たるらしく、『中』である念力では一瞬動きを止めるのが精一杯らしい。

「じゃあ次はアタシね」

命音が斎藤に向かって能力『音』を飛ばす。脳を揺さぶって気絶させるとかいう、アレだ。でも命音と斎藤の間には客達がいるワケで。僕と稔が止めようとした時には既に遅く、数人の客がぶっ倒れてしまった。斎藤といえば、治癒力を上げているので多少ぶらつ

いた程度に終わった。

「命音……」

僕と稔からの冷たい視線に、暴走バカ娘はテヘツと可愛く舌を出していた。可愛いケド、これは許せねーっつ。後で村田氏に報告してお置きだな。

などとアホな事をやっている間に、齋藤は階段を二段跳びならぬ全段飛びで駆け上がっていった。さすが身体強化だなー。

階段にはあまり人気がひつけなかったの、僕は能力を使って宙に浮いた。そしてジェット噴射をイメージして、某ロボットアニメのキャラクターのように凄いスピードで不良男に追いついた。これはアレだ、言うは易し、ダネ。勢いが付き過ぎて壁に激突しそうになったのは内緒だ、うん。ガクガクブルブル。

「へえ。面白い能力だな。よし、お前は絶対にオレのモノにしてやる」

げえ。キモイヨ。これはマジでさっさと捕まえねば。鳥肌が全身に立ったのは言うまでもねーです。

僕はベルトから警棒を取り出し、齋藤に向けて振り下ろした。まああっさり避けられるわな。身体強化で視力も良くなってるみたいだし。でも、

「……チツ！」

齋藤の動きが一瞬止まる。やっと追いついてきた稔の念力だ。そ

の際に僕の警棒が斎藤の腹（・・・いや、もうチヨイ下な）に直撃。あー・・・うん、手加減はした。後で警棒の洗浄と消毒しなきゃな（少し現実逃避・・・）。

すっごい形相で蹲る斎藤。あー、うー、ゴメン？

とどめとばかりに命音の音攻撃。気絶してぶっ倒れる不良男。

・・・少し不憫な気がしたのは気のせいじゃねーです、ハイ。

「三人の連携攻撃！ 恐れ入ったか！」

・・・命音よ、打ち合わせなしの連携攻撃は凄いと思うが、斎藤の頭をふんづけてそっくり返るのは止めておけ、余計に不憫になるから。

まあ何はともあれ、あっさり白目を向いている不良男を捕まえたという事で、ゲーム終了デス。

一応念の為にサイキックリング付けておこう、うん。

やれやれ、と溜息を吐いていると。

バキッ

上から何かが壊れるような音が聞こえた。慌てて見上げると、

「室外機!？」

業務用らしき室外機（エアコンに繋がってるアレ）と鉄柵が落ち

てくる！

そのまま落ちれば命音とその下の斎藤に当たる。稔の念力では重過ぎて止められない。命音の音では弾く事も砕く事も出来ない。

一瞬の間にそう思い巡らせた僕は、咄嗟に能力を使って跳躍、持っていた警棒を振りかぶった。ついでに腕力の強化（斎藤を見てイメージしてみた）も行っている。

警棒は正しく室外機と鉄柵を弾き飛ばし、壁にぶち当たった。警棒の方も無事では済まず、バキリと嫌な音を立てて折れてしまう。

あー！！ 僕の警棒があああー！！

と床に着地した僕は肩を落として頂垂れる。が、命音にドーン！と体当たりをかまされて抵抗する暇もなく転がった。

「アユミン、ありがとー！！ カッコよかったよー！！」

お腹辺りに抱き付かれながら、命音の叫びを聞く。・・・どうでもいいが、胸が当たってマス。

「凄いや、歩夢君。まさに無敵だね」

稔よ、褒めてくれるのは嬉しいが、いい加減助けてくれえ・・・。

命音が放してくれるまでジタバタ暴れまくっていた僕でした・・・。

しばらくして目を覚ました斎藤は、身体が縛られているのに気付いて盛大に舌打ち。

「タダモンじゃねーから、同じ超人かと思ってたが・・・何モンだ？ お前ら」

超人？ 超能力だって事知らないのか？

「あなたと同じ超能力者ですよ。種類は違いますがね」

「超能力者あゝ？」

「そうです。あなたの場合は身体強化の能力です。人間の肉体が能力なしにあんな力を出せるはずないでしょう」

・・・顔は笑顔だケド、声に冷やりとしたモノが混じっている気がする・・・怒ってますネー。

でも不良男は気が付かないらしく、刺々しい雰囲気消さずに言い返す。

「ハンツ！ 超能力だろうが超人だろうが一緒だろうが！ こんな縄、すぐにぶち切って・・・な、何！？」

斎藤は能力で力を上げ、縄をぶち切ろうとしたが、縄はビクともしない。

「何でこんな脆そうな縄が・・・！」

「切れませんよ。歩夢君の能力で鎖より強い耐久力を持たせてありますから」

そう。僕は縄に鎖のイメージをかけて丈夫にしておいたのだ。この縄はすぐ近くに落ちていた物で（なぜ落ちていたのかは不明）、そのままでは逃げられるだろうからとやっておいたのが役に立った。

「クソ！ 一体どんな能力なんだよ！」

「教えてもいいですが、その前にあなたに協力してもらいますよ」

「協力だあ〜？」

「はい。詳しい話は向こうについてからです。俺達が勝つたら何でも聞くと約束したでしょう？」

斎藤が鬼のような形相で睨んでる。スッゲーコワイ。

だが斎藤は観念したのか素直に僕達についてくる。まあほどこいた縄を首に巻き直して、逃げたら締まる、とか言われたら逃げられないわな（これは稔の発案。能力を使う僕はビクビクもんだ）。

というワケで秘密組織に不良男を連行。その道すがら訊いてみたのだが、何とゲームセンターの客達は斎藤の超人っぷりを見慣れているそう。気晴らしと称しては数人の不良グループとゲームをして、金を巻き上げていたらしい（！）斎藤。それを賭けの対象にしてたっというんだから、客達の凶太さはそれこそ超人だな。不思議に思われないのがスゲーよ。

ちなみに命音と斎藤を襲った室外機は、斎藤を恨んでいた不良達の仕業だった。金を巻き上げられ、恨みを晴らすとしても逃げられる相手が気絶しているというチャンスに、不良達は行動を起こしたのだ。まあ残らず捕まえて付近の交番に突っ込んでいたケドネ（ニヤリ）。

村田氏に報告して斎藤を突き出す。後の説明は村田氏がしてくれ

るだろ。そう思って部屋を出ようとした僕達だが、一緒にいてくれと懇願されました。何でも斎藤の三白眼が怖いらしい。

・・・それでもここの責任者が、オイ。

とにかく、村田氏の説明を聞いて組織に協力する事にした斎藤。まあ今まで金を巻き上げてきた事や怪我を負わせた事などで罪に問われるよりは、と思っただけ。後は僕と命音を自分のモノにする為だとか。

いい加減嫌になって僕は男だと伝えてみた。最初はなかなか信じなくて服まで脱いだ（ギャー！）のだが、それでもエモノ認定は取り消されなかった。何故に？

僕達と同じように個室を用意された斎藤は、嬉々として移住してきた。何でも一人暮らしをしていたそうだが、ここなら金を使わなくても衣食住が確保されるから、らしい。こいつも色々と暗い過去がありそうだな。まあ同情なんてしてやらねーケド。

まあそんなこんなで仲間が一人増えました。

身体強化と鬼ごっこ・・・（後書き）

もしこの物語が終わったら、番外編とか後日談とか書きたいですね。そういうの大好きなんで（読むのも書くのも）。その辺に稔達の過去とか入れたりも良いかも・・・。

ただ執筆速度が亀並みなので・・・いつになることやら（汗）

影の正体と未来と・・・

うーむ・・・。

自分の部屋（自宅）で一人唸っている僕です。何故って？ 最近命音と強司が僕を巡って張り合ってるからです・・・。

強司の奴、命音がアホだって事に気付いて僕だけを狙い始めたらしい。男には目の毒である（ある意味女もか）命音の胸にも一切未練を残さず、何故か僕だけを。一度訊いてみたら、「アホな女は大嫌いなんだよ！！」と本人いる前でこれでもかっ、ってぐらいに叫びやがった。自分棚上げかい。ってか過去に何があった。

その時から二人の戦いが始まったのデス（俺の意思是・・・）。

今日も今日とて学校が終わった後に秘密組織に行ったら、後ろから命音、前から強司に抱き付かれて非常に暑苦しかったデス。そのままギャンギャン文句を言い合う二人の方がお似合いじゃね？ っと言ったらスッゲー嫌な顔された。

勉強しに行ったハズなのに全く出来なかったっていう・・・ホント邪魔でしかないよネ、アンタら。

ああ、そうそう。最初は斎藤と名字で呼んでた僕だケド、命音に對抗して名前で呼べっ、って言われたので強司。名字で呼んだら返事しないっていう徹底ぶりだったから仕方なく、な。

能力のコントロールはまあまあ、って事で訓練はないらしいし、それなりに優秀だと思っただケド・・・普段の言動がアレなんで、

罵詈雑言は控えてマスヨ。

「何とかならんもんか……」

溜息を吐きつつベッドへゴ―。今日も疲れた、さっさと寝てストレス発散しよう。

「おやすみ〜」

目を閉じて夢の中へ。疲労のせいでいつもより旅立つのが早かったッス……。

気付けば体育館。もう訓練といえばここしか思い付きません。

今日は何の練習をしようかな〜と考えていると。

「またか……」

違和感登場。だが今回は……。

「人……?」

黒い影は人の形をとっていた。透けてはいるものの、完璧に人間だ。

姿としては、黒い外套と黒いズボン、黒髪黒眼と黒づくめ。身長は結構高いな。そして顔はといえば、

「……僕?」

そう。僕に似ていたのだ。まるで僕が成長して二十歳くらいになったような……。

僕が成長したら母さんみたいになるんじゃないかと思ってたけど、そっくりというほどではない。美少女然としていた風貌は美青年と呼べるほど男らしくなっていた（自分で言ってる複雑だな……）。

呆然と見惚れていると、黒づくめの人物は誰もが骨抜きにされそうな甘い微笑を浮かべ、口を開いた。

「俺の声が聞こえているか？」

「き、聞こえてるけど……」

今までになくハッキリと聞こえた。現実にいる人だと思えるほど生気に満ちた、低い美声。

……アレか、自分に似てるから最大に美化してるのかな、僕。

「良かった。なかなか繋がらなくて心配していた。これでやっと伝えられる」

ん？ 伝える？ 何を？

首を傾げると、彼はフツと笑い、僕の顔に手を伸ばしてきた。

「昔の俺ってこんな顔してたんだなあ」

……やっぱり未来の僕なワケ？

しみじみと呟く相手の顔を凝視しながら、僕は口元をヒクつかせていた。勿論嬉しさの余り。

だって成長しても女々しいままだったらどーしよう、ってずっと悩んでたんだぞ！？　こんなに男らしくなるなら万々歳だ！！

固く拳を握って歓喜中。イエーイ！

「ああ、悪い。話を戻すが、俺がお前の夢の中に出てきたのは理由がある」

フムフム。さっき言ってた伝えられる云々だな。

「とても重大な事だ。心して聞けよ」

そんなに大変な事なのか？

僕はゴクリと唾を飲み込む。

「村田氏に娘さんがいる事は知っているな？」

娘さん・・・確か八歳になる、現意識不明で入院している子だな。

「彼女が意識不明に陥ったのは能力の暴走だ。彼女の能力は『爆発』。幼い身体ではコントロールできなくて、辺り一帯を巻き込んで大爆発を起こし、半径五十mが焼け野原になった。村田氏の機転で死傷者は出なかったけど、それ以来ずっと眠りっぱなしだ」

ひょえ〜。そんな事があったのか。ってかそんな大事おおいこと、ニュース

になつてそんなものだケド・・・ああ、報道規制か・・・。

「そしてお前の時代から約五年後。再び彼女の能力は暴走する」

ナヌ！？ また辺りが焼け野原か！？

「お前の考えている通り、焼け野原だ。だが前回とは規模が全く違う。五歳の時の彼女の強さは『強』だったが、今度の強さは測定不能。半径十kmが被害に遭つた」

「十km！？ そんなに！？」

「ああ。さすがに死傷者はたくさん出た。その中には村田氏や稔、強司も入っている。そのせいで特別警察外部組織は解体、超能力者は皆に恐れられる存在となつた」

「・・・」

「今俺がいる時代では超能力者の可能性がある者は容赦なく殺されるか、一生檻の中だ。俺は能力を使って逃げおおせてはいるが、このままでは時間の問題だな」

そんな・・・そんな未来、悲し過ぎる！！

「どうすればいい？ どうすればそんな悲しい未来を防げる！？」

「彼女を起こせ」

「起こす・・・？」

「彼女の力は成長することに大きくなっていく。二度目の暴走時、彼女の力は身体に収まりきれないほど大きくなっていた。それまでにコントロールする術を身につけさせるか、もしくは・・・」

・・・続きは聞かなくても想像できた。

「殺す・・・か・・・」

未来の僕の顔が苦痛に喘ぐように歪む。彼にとってそれは受け入れ難い事なのだ。当然僕も同じ顔をしているに違いない。

「他に方法があるのかもしれない。だが俺ではもう何もできない。だから・・・頼む・・・」

深々と頭を下げる彼。その姿からは焦り、苛立ち、そして悲しみが伝わってきた。

「・・・分かった。なんとかかしてみる。他にも方法がないか、探してみる」

「ありがとう!!」

「礼はまだ早いよ。他の方法なんて見つからないかもしれないし、彼女が暴走してしまうかもしれない。まあ、上手く行くよう祈ってよ」

「ああ」

上げた顔にはあの甘い微笑が戻っていた。だが目は相変わらず暗い色をしている。

「今の僕が、大丈夫だなんて言えない。何が出来るかも分からない。でも・・・せつかく出来た仲間を失いたくないし、今の生活を失くしたくない。だから僕は全力を尽くすよ」

いつからだろう。今の生活を大事に思い始めたのは。少し前まで夢に逃げ込みたいと思うほど現実にウンザリしていたのに。両親は優しく大好きだケド、力の事を話せなくてとても辛かったのに。

だから今の生活は幸せだとハッキリ言える。稔のからかいも、命音のスキンシップも、村田氏の悪戯も、強司のバカさ加減も、全て今の生活になくてはならないもの。まあ・・・たまに行き過ぎる事

もあるケドネ……。

つい遠い目をしていると、未来の僕はジッと凝視した後、クスリと笑った。

「うん、お前ならなんとかできそうな気がしてきた。変だな、お前は俺なのに」

「いくら自分でも生きてきた時間が違うんだから考え方が変わってもおかしくないって」

「だな。じゃあ俺はもう行くよ。健闘を祈ってるぜ」

いや、戦うワケじゃないだろうに……。

未来の僕は綺麗な敬礼をすると、その身体を薄れさせていった。完全に消える直前に見た彼の目は、もう暗い色を宿してはいなかった。

僕が言うのもなんだケド、頑張れよ……。

その咳きが聞こえたかどうか……。僕は覚醒の前兆である景色の揺らぎを感じて確かめる事は出来なかった。

目を覚ました僕は、カーテンから漏れる光をジッと見ていた。僕の頬が涙で濡れているのに気付いて、苦笑する。

この涙は彼の悲しみだ。もう二度とこんな涙を流さないよう、僕が頑張らねば。

「よし。」

勢いよく起き上がり、顔を洗う為に部屋を出た。

少女と花言葉と・・・

「娘の入院先？」

「はい」

村田氏の訝しげな声に、僕は頷く。

ちょうど学校が休みだった今日、朝食を食べてすぐに秘密組織へ向かった。そして脇目もふらずに向かったのは村田氏の部屋。挨拶もそこそこに、本題を切り出したのだ。ただ未来の事を話すと心配するだろうと思ってそっちは割愛。

「何故そんな事を訊く？」

「娘さんは意識不明の状態なんでしょう？　もしかしたら目覚めさせる事が出来るかもしれないと思って・・・」

「何っ!？」

ガタン、と勢いよく立ち上がったせいで椅子が倒れる。おかげで周りの視線が痛いつて・・・。

「それは本当か！」

「断言はできませんよ。僕は能力のすべてを把握しているわけじゃありませんから」

未来から来た僕も『夢現』を使ってやってきたんだろう。一体どこまでできるのか……。自分の事なのに分からない。まあさすがに死んだ人を生き返らせる事までは出来ないだろうが。

「そうか・・・『夢現』か・・・」

「意識不明といつても眠っている状態と同じようなものでしょう。夢なら僕の管轄ですし」

「・・・頼めるか」

「勿論。その為に今日は朝早くから来たんですから」

いつも悪戯っ子のような顔をしている村田氏が、どこか縋るような顔をしている。当り前か。娘さんが目覚める事を一番願ってるんだから。

「今まで何をやっても目を覚ます事がなかった。超能力なら、もしかしたら・・・」

「病院はどこですか？」

「あ、ああ。案内する」

村田氏が慌てて帰り支度。あれ？ 仕事は？ と思ったが、周りの人達が何も言わないので大丈夫なのだろう。まあ親バカな村田氏を止められる人はいないと思う。あの助手でさえも何も言わずに見送ってるし。

村田氏の運転でとある病院に着いた。車で十分ほどの場所にある、とても大きな病院だ。

速足で歩く村田氏の後を小走りで追いかけながら、僕はキョロキョロと辺りを見回していた。

何気に金持ち？ さすがあの秘密組織の責任者。

娘さんは個室のベッドで眠っていた。八歳になると聞いていたが、見た目は五、六歳に見える。

「梨花だ。暴走の後からずっとこのままだ。妻は梨花を怖がって、離婚して以来一度も会いに来ない」

怖がって……か。僕の両親は怖がらなかった。むしろ見たい、と望むほど変わった両親だ。それを思えば僕は幸せなんだろうな。

顔を覗き込むと、少し痩せてはいるが可愛い顔立ちをしていた。目は閉じているから分かりづらいが、とても大きい。

頬にかかる髪をかき上げ、僕は白い額に手を伸ばす。だが少し考え、手を引つ込めた。ベッドの脇に座り、梨花ちゃんの額に額を合わせて、目を閉じ……ようとして村田氏に肩を掴まれた。オイ。

「何をしようとしているんだい……？」

ああ、そう言えば親バカ度半端ないんだっけ、この人（助手談）。可愛い可愛い娘に将来彼氏が出来ようものなら、ぶっ飛ばすどころか殺してしまいそんな勢いだと噂されてたっけな（これまた助手談）。ってか別にキスしてるワケでもないんだから、少しは我慢してほしいよ、たく。

「今から梨花ちゃんの夢の中に入ろうかと。それには額を突き合わせている方がやりやすい気がする」

「夢の中へ入る？ 何故だ。目が覚めるイメージをすればいいんじゃないのか？」

「ん……説明するのは難しいんですが……。ずっと引つかかっていたんですよ。能力が暴走しただけで意識不明って。梨花ちゃん自身に何も怪我はない。脳にだって何の異常もなかった。だったら、もしかしたら心の問題なんじゃないかって」

「心……？」

「はい。だから本人に訊いてみたいんです。もし何も問題ないのならそれこそイメージすれば良いですから」
「・・・分かった」

村田氏は渋々といった感で肩から手を放した。だが何かあればすぐに止めるぞ、的な感じで近くに立っている。・・・やりにくいっつーの。

僕は溜息を吐きつつ、再び額と額を合わせた。そして目を閉じ、イメージする。僕の意識と梨花ちゃんの意識を繋げ、同じ夢を見れるように。

気が付けば僕は一面花畑の中にいた。この花は確か、おしろいはな白粉花とサルビアだったか。

辺りを見回すと、花に埋もれて気付きにくかったが、一人の少女が寝転んでいた。目は閉じているが意識は突然入ってきた僕に向いている。

「君が梨花ちゃんだね」

名前を呼ぶと目がぱちりと開いた。

現実で見た少女と同じ顔。黒い艶やかな髪に大きな瞳。とても可愛い女の子。

「・・・だれ？」

幼い子特有の高い声は愛らしく、思わず口元が綻んでしまう。

「僕は進堂歩夢。君のお父さんの部下だよ」

そう言うと、梨花ちゃんはちょっと首を傾げ、あっ、と何かに気付いたように見上げてきた。

「あたまが良くて仕事ができるかわいいお兄ちゃん！」

思わずズッコケました。

僕の口元がヒクついたのでお分かりだろうか。「頭が良い」や「仕事が出る」は勿論褒め言葉。だが最後だけは僕にとっては余計だった……。泣いていいよね……。

「えっと……。何で知ってるのかな？」

「いつもお父さんがはなしてくれるの。リカと同じちょうのうりよくしゃで、のうりよくはとても変わっているって」

……。まあ確かに変わってるわな。否定は出来ん。だが村田氏よ、一体僕の事をどう話しやがったんだ。

「そっか。まあ僕が君の夢の中にお邪魔できたのは能力のおかげだし、変わってるといえば変わってるか」

ん？ と僕を見上げていた彼女は、すっと立ち上がるとキラキラした瞳で告げる。

「のうりよく見たい！ どんなの!？」

うおー。子供の眼差しって眩しいなあ。僕もこんな時期があったんだろうか。

「良いよ。じゃあ空を飛ばうかな」

もうすでにお約束ではなからうかと思いつながら、宙に浮く。それだけで尊敬の眼差しを向けてくるんだから、子供って単純だよなえ（今お前はひねくれてる、何て言った奴、前へ出る）。

まあ僕に対する警戒心は薄れたみたいだから、話を聞くとしよう。

「梨花ちゃん」

「なあに？」

花畑の中に座って膝をポンポンと叩くと素直に乗ってくる。可愛いなあ。

「さっきお父さんがいつも話してくれる、って言ったケド、『外』からの声、聞こえてるんだね？」

「うん！ 楽しいおはなしとか、お仕事がたいへんだとか、いろいろはなしてくれるよ」

「でも君からの声は届かない」

「.....」

嬉しそうな笑顔から一転、悲しそうな顔になる梨花ちゃん。

「お父さんはね、君の声を聞きたいと思ってる。それには君が目を覚まさないといけない。でもずっと眠ってるのは・・・君の意思なんだね？」

僕がそう思ったのはこの花畑を見たから。白粉花の花言葉は『臆病』。サルビアは『家族愛』。

「……うん」

「どうしてか、訊いても良いかい？」

梨花ちゃんは口を引き結んで俯いてしまっ。

僕はそれ以上何も言わずに優しく背中を撫でていた。

「……こわいの」

しばらくして聞こえた声は呟くような小さい声だった。

「ドカーンってすごい音がしたあと、リカ眠っちゃったの。でもすぐにおきなきや、って思っ目をあけたの。そしたらお母さんがすぐこわいかおでリカを見て、『アタシの子じゃない！ 化け物よ！』って言ったの」

……なんつー母親だ。自分の娘だろ！

「リカがいたらお母さんみたいにみんなこわがると思ったの」

「だから眠ったまま？」

「……うん」

ますます俯いてしまっ梨花ちゃんに、僕は撫でる手を止めずに優しく語りかけた。

「少なくともお父さんは怖がらないよ」

「……ほんと？」

「ホント。断言できるよ。君のお父さんは絶対に君の味方」

おずおずと顔を上げる梨花ちゃんはまだ不安そうな顔をしている。

「もし怖がったら僕がぶっ飛ばしてあげる。僕的能力を使えばボツボツだよ?」

マジで一回ボツボツにしてやったしな、ケケケ。

「んゝゝゝじゃあやくそく!」

「約束?」

「お兄ちゃんはリカの味方なんだよね?」

「うん。ずっと君の味方」

「じゃあり力をこわがったら、ボツボツね!」

・・・本当に父親を愛しているのか、梨花ちゃん・・・。

内心冷や汗を垂らしつつ、僕は梨花ちゃんの小指に小指を重ねる。

『ゆーびぎーりげんまん、うーそつーいたーらはーりせんぼんのーます。指きつた!』

そこでやっと梨花ちゃんの顔に満足そうな笑みが浮かんだ。まあこの笑みが見れるんだ、多少の事(ボツボツの件)は目を瞑ってもらおう(覚悟しておいてもらおう、村田氏。ケケケ)。

「それじゃあお父さんの所に行こうか?」

「うん!」

小さな手と手を繋いで、僕達は花畑の中を歩きだした。

『爆発』とお嫁さんと……（前書き）

ずっとシリアス続きだった気がするので、そろそろコメディーとは
言えないんじゃないかな……などと思ったのは秘密です（爆）

『爆発』とお嫁さん……

「う……ん……」

目を覚ますと、目の前に梨花ちゃんの顔があった。額を突き合わせていたハズだったが、いつの間にか隣に寝そべっている。ゆっくり身体を起こすと、心配そうにこっちを見る村田氏と目が合った。

「どうなんだ？ 梨花は目を覚ますのか？」

「大丈夫です。ホラ」

視線を下に向けると、梨花ちゃんの瞼がピクピクと動いているところだった。ゆっくりと開き、それを見た村田氏が感動のあまりポロポロと涙を流している。それはもう、滝のように。

「お父……さん……」

「梨花……！」

感極まって娘を抱き締める父親。傍から見れば感動的な光景。だが。

「……何で稔達までいんの……？」

部屋に備え付けのソファに座ってお茶を飲む稔、命音、強司。まあそれくらいならまだ許せるよ？ でも命音と強司、お菓子を取り合って険悪ムードはやめれ！。

それを止めようともしない稔に険しい視線を向けてみた。

「歩夢君が夢の中に入ってから一時間くらい経ってるんだ。心配になつて駆け付けるのは当たり前前だろう？」

言っている事はありがたい。ありがたいが、それなら他二名を連れて来るなよ、と言いたい。

「二人は勝手についてきただけ。俺に文句を言われてもねえ」

・・・口に出した覚えはないんだが。アレか、テレパシー能力、進化したのか、コラ。

「全部顔に出てるよ」

オウ。そんな単純な顔をしてたのか、僕！

「フウ・・・まあいいや。ちょうどみんなに話があったから」

溜息を吐きつつチラリと父子を見ると、いまだに感動の抱擁中。そろそろ梨花ちゃんがやめてほしそうにしているのが笑える。

「村田さん、そろそろやめてあげたらどうですか。大事な話があるんですから」

「む、せつかくの感動の抱擁を・・・」

「そんなのいつでも出来るでしょ。ホラ、梨花ちゃんも迷惑そうにしていますよ」

そう言つと村田氏は光の速さで梨花ちゃんから離れた。こっちも単純だな。

「それで、話とは？」

急に真面目になったな、オイ。

僕は呆れつつも真剣は表情を貼り付けた。

「今回梨花ちゃんを目覚めさせようと思ったのは、未来を変える為だったんです」

「未来を変える?」

「はい。梨花ちゃんにはちょっと酷な話になるけど、聞いてくれる?」

「・・・うん」

健気にも頷いてくれる梨花ちゃん。可愛いなあ。こんな妹欲しい。

とと、話が逸れるところだった。

「実は僕の夢に、未来の僕だという人物が現れたんですよ。彼が言うには、約五年後、梨花ちゃんの能力が再び暴走し、前回よりもさらに大規模な爆発が起こる、という事でした」

「な・・・!」

村田氏絶句。無理もないが。

「半径十kmが焼け野原になったそうです。死傷者もたくさん出たと。勿論村田さんや稔もその中に入ってます」

「・・・」

みんなは言葉もなく僕を見詰める。

梨花ちゃんはガタガタと震えだしていた。僕は申し訳なく思いながらも、彼女の肩を抱いて続ける。

「結果、特別警察外部組織は解体。超能力者はみんなに恐れられるようになり、容赦なく殺されるか、一生檻の中だそうです。未来の僕は能力でなんとか逃げていたようですが」

「そんな・・・」

呆然と呟く村田氏。

みんな僕のことを知っているから、未来の僕の話も信じてくれているようだ。

「何だよ！ 超能力なんて持ちたくなくても持つちまう奴だっているだろ！ 殺されるなんてまっぴらだぞ！」

強司が三白眼をさらに尖らせて怒鳴る。梨花ちゃんの身体がビクリと震えたので、宥めるように撫でながら強司を睨んだ。

「怒鳴るな。梨花ちゃんが怯える」

「・・・スマン」

強司がしおしおと蹲る。そっちはスルーだ。

「だから未来の僕はそんな事が起きないように頼んできたんですよ。未来を変えてくれと。その為には梨花ちゃんを覚醒させ、能力をコントロールできるようにすればいいと思ったのですが・・・」

「ですが・・・何だ？」

村田氏も梨花ちゃんの頭を撫でながら悲痛な面持ちで聞いている。

「梨花ちゃん的能力は成長することに大きくなっていく。それを完璧にコントロールするのは不可能だと思います」

そう。未来の僕は言明を避けたが、大きくなり過ぎた力を完全にコントロールする事は、身体が成長しても難しいのだ。だからその他に方法がないか、みんなで考えたい。

「もし何か良い方法がなければ・・・」

その続きは辛すぎて言えない。だが梨花ちゃん以外はみんな分かったようだ。

「それだけは駄目だ！ 梨花は私の娘だ！ 絶対に死なせない！」

村田氏が僕を睨みながら言う。僕はその視線を受け止める事しかできない。

『夢現』という能力について知った時、僕は何でもできるんじゃないかと思った。夢は無限だ。制限なく考える事が出来る。それを現実に出れるのだから、そう思っても無理はないだろう。

だから勘違いした。みんなを守る事が出来ると。でも未来の僕の話聞いた時、それは間違いだと気付いた。僕にも限界はある。

それでも助けたいという思いだけは失くしたくなかった。だから仲間達に懇願する。良い方法を考えたいと。一緒に考えてほしいと。

「他の方法か・・・コールドスリープとかサ」

「それじゃ根本的解決になってませんよ」

「暴走しそうな時は広い場所に移動しておくってのは？ 海とか」

「爆発の原因を隠し通せるのか？」

「地図にも載ってない島なら・・・」

始めから命音、稔、強司、僕、村田氏。だがどれも良い方法とは
言えない。

『うーん・・・』

五人で唸っていると、梨花ちゃんがひつく、ひつくと泣き出して
しまった。僕達は慌てて梨花ちゃんを慰める。

「ゴメンナサイ・・・ゴメンナサイ・・・」

「泣く事なんかないよ。梨花ちゃんは悪くない」

「そーそー。能力が悪いんだからサ」

「その言い方もどうかと思います・・・」

「梨花の事はパパが絶対助けるからね」

「オレは可愛い娘の味方だしな」

個性があり過ぎて誰のセリフか説明しなくても良いよね？ え？
してほしい？ しょうがないなあ。始めから梨花ちゃん、僕、命
音、稔、村田氏、強司の順である。最後に強司を殴る村田氏の姿が
あったが、どうでもいい事だネ、ウン。

「っていうか、能力があるからいけないんだろ!？」

あ、強司がキレた。そんなに痛かったのか？

「能力を失くす事は出来ねーのかよ！ そつすりゃ万事解決、だろ
!」

「そう簡単に行くわけ」
「それだ!!」

突然叫んでみんなの視線を集めてしまう稔。さすがに恥ずかしいのか頬が赤くなっている気がする。

「良い方法があったのかい？」

「うまくいくか分かりませんが・・・歩夢君」

「何？」

「君の能力で、梨花ちゃんの能力を消す事は出来ない？」

「え!？」

思わず驚愕の声を上げてしまう。だってそれは人間の身体を弄るという事だから。

「もし能力を消す事が出来れば万事解決、強司の言う通りだ。それ
が出来る可能性が少しでもあるなら、試してみるべきだよ」

「でも・・・」

確かに良い方法には違いない。だが他人の身体を勝手に弄るのは
良い事なのか？

躊躇っている僕に、小さな手が差し出された。

「やって、お兄ちゃん」

「梨花ちゃん・・・」

「リカは大丈夫だよ。お兄ちゃんのこと、信じてるもん」

顔には満面の笑み。その目は信頼の色を宿している。

思わず村田氏を見れば、力強く頷いてくれた。

「頼むよ。私も君を信じる」

僕はその言葉が嬉しくて、泣きそうになりながら梨花ちゃんの手を握った。

「それでね、リカおねがいがあるの」

「お願い？」

「うん。リカが大きくなったら、お嫁さんにして！」

ガターン！

村田氏が勢いよく立ち上がったせいで椅子が倒れる。あれ？ デジャ・ビュ？

「梨花！ 何を言ってるんだ！」

「だって歩夢お兄ちゃんはやさしいし、きれいだし、強いもん。お父さんだってあたまが良くて仕事ができるってほめてたもん」

「う・・・それはそうだが・・・」

「これ以上のゆーりよーぶっけんはないでしょ？」

梨花、おそろしい子・・・！

え、確か八歳だったハズだよネ・・・しかもずっと眠ってたハズだよネ・・・。

梨花ちゃんに言い包められそうになっている村田氏に、哀れ味方は・・・

「歩夢お兄ちゃん、リカの味方になってくれるって言った」

う……！

「ゆびきりもした」

う……！

「やくそく、やぶつちやダ……」

大きな目に涙が……あゝ！ もう！

「分かった。梨花ちゃんが大人になってもまだ僕の事を好きでいてくれたなら考える」

勝てないデス……この目には勝てないデス……！！

「やったあ……！」

「アユミン……？」

「歩夢……？」

二人とも、そんな見捨てられたような顔やめれ。そして村田氏よ、そんな絶望した顔しないでください、親バカ通り越して娘LOVEかって言いたくなるから（顔かれそうでもっと怖い……）。

「と、とにかく試してみますから離れてください！」

そう僕が怒鳴るまで、このカオスは続いた。マジ泣きますヨ……ぐすん。

『爆発』とお嫁さんと・・・（後書き）

見ていただいている方がいらっしやるととても嬉しいですね。
ありがとうございます。――（――）

超能力消失とキスと・・・

まだブツブツ言っている村田氏を部屋の隅に追いやり、他の三人は再びソファへ。僕はベッドに座る梨花ちゃんの隣に腰掛け、額を突き合わせた。

「もし変な感じとか痛みがあつたら言つてね？」
「うん」

素直に頷いて目を閉じてくれる梨花ちゃん。僕は思わず苦笑を浮かべる。

良い子なんだよね。お嫁さん云々も、僕を信じてくれている証拠だ。

これは頑張らねば、と気合を入れ、僕も目を閉じた。

頭の中でイメージする。梨花ちゃんの中にある能力が消えるイメージを。元から超能力なんてなかった、普通の女の子なのだと、言い聞かせるように。

最初は効果があるのか分からなかった。だがゆつくりと、僕の意識が梨花ちゃんの意識に繋がるのが実感できた。そのまま、僕は彼女の心奥らしきところにまで潜っていく。

やがて奥の方に光り輝く物が見えた。とても大きく、力強い光だった。

僕の意識はそれに近付き、手を伸ばすようにそれに触れる。

これが・・・超能力なのか・・・？

確かにこの力は強大だ。八歳という身体には不釣り合いなほど。

これを消す。そうすれば彼女は普通の女の子になれるハズ。

僕の意識が光を包み込む。掌で包んだ物を握り潰すように、僕はそれに力を加えて潰した。その瞬間、光が弾けて僕の意識は吹き飛ばされるように外へ弾かれた。

気が付くと僕は体育館にいた。ああ、いつもの夢か。

あれ？ 梨花ちゃんはどうなった？

と首を傾げていると。

「超能力は消えたよ」

低く響き渡る美声。その声の主に、僕はゆっくりと振り向いた。

「未来の僕・・・」

全身黒づくめの、僕が成長した姿。

「あれ？ 超能力が消えたのなら、未来は変わったハズじゃ？」

再び首を傾げると、彼は苦笑混じりに教えてくれた。

「まあな。ここにいるのは夢の残滓。そのうち消えるさ」
「そっか・・・」

少し寂しい気がする。話をするのはこれで二回目。それだけの短い時間でも、彼との時間はとても大切なものだったから。

「そんな顔すんな。俺はとても感謝してるんだ」
「感謝？」

「ああ。まさか能力を能力で潰すなんて、思い付かなかったぜ。俺も早く気付いていれば・・・」

「僕が思い付いたんじゃないよ。強司と稔がいたからこそできた事だから。つくづく仲間は必要だって感じた」

「だな。俺もそう思うよ」

二人して楽しみに笑い合う。だがそんな穏やかな時間は長くは続かなかった。

「あ・・・っ」

黒づくめの彼の足先から、光の砂が・・・いや、粒子というべきか。それが風に煽られるように散っていく。右足から、そして左足から、光の粒子となつて姿が消えていく。

「・・・お別れだ」

「・・・っ!!」

思わず行かないで！ と叫びそうになった。だけどそれは叶わない事を知っている。

「そんな顔すんなって。また会えるだろう？ 俺達は」

「また・・・会える？」

「そう。お前が成長すれば、そこには俺がいる。お前であって、俺でもある。だろ？」

「・・・うん」

僕はただ頷く事しかできなかった。頬にはとめどなく流れる涙。

彼は仕方ないな、と言いたげに笑って、光の粒子になりかけている右手で頬を拭ってくれた。・・・あたたかい。

「・・・またな」

身体が、首が、顔が粒子に変わっていく。最後の粒子が散る瞬間、聞こえてきたのは再会を願う言葉。その言葉に、僕は「うん」と返事を返した・・・。

「う・・・」

目を覚ました僕が最初に見たのは心配そうに覗き込んでいた梨花ちゃんの顔。

彼女は僕と目が合うと、ハツとしたように後ろを振り返った。

「起きたよー！」

視線をそっちに向けると、これまた心配そうに見ていた村田氏、稔、命音、強司がいた。

「大丈夫かい？」

「気持ち悪くはない？」

「アユミン！ 大丈夫！？」

「どこも痛くねーか！？」

四人が同時に口を開くもんだから、ハッキリ言って聞き取れない。
。。。

でも僕を心配してくれてるのは分かったので、頷いておく。

「大丈夫。なんともないよ」

二カツと笑うとみんな安心したように深く息を吐いた。

「良かった〜……。あれから二日も眠ってるんだもん。リカのせいでしんじゃないらどうしようって思ってたの……」

シュン、と落ち込む梨花ちゃん。あれ？ 僕そんなに寝てたのか。

「あ、梨花ちゃん的能力……」

「装置で調べたよ。能力は無くなっていた。これでもう暴走する事はない」

村田氏が嬉しそうに教えてくれる。良かった。ホント良かった。

「これからも暴走起こす奴が現れても、アユミンの能力で一発だネ」
「命音。歩夢君は二日間も眠っていたんですよ。もし何かあったらどうするんですか」

「そーだそーだ。歩夢の方が大事だろ」

あゝ、三人の言い合いが懐かしく感じるのは何故だろう。どーでもいいケド。

「大丈夫だよ。コツは掴んだから、次からは気絶したりしない」

あの時は光の爆発をまともに食らったからな。今度は逃げよ、うん。

うんうん頷いていると、村田氏が仕事の顔に戻って告げた。

「これは歩夢君をリーダーにしないとな。よし、権限を警視正に引き上げる、つてのはどうだろうか。うん、良いアイデアだ。そうすれば我が組織で私の次に偉いという事に・・・」

ちよつと待てええええい!!

「いきなり何言つてんですか！ 無茶苦茶でしょう!？」

「梨花の伴侶になるかもしれないというのに、引き上げてどうする！ 並みの男にやるわけにやいかん！」

「公私混同じゃねえか!!」

「公私混同結構!! 梨花に相応しい男になつてもらうぞ!! 我が息子よ!!」

早えええええ!! まだ結婚してねえし!! つか伴侶になるかも分からんっつーの!! しかもアンタ最初反対してただろうが!!

「ダメ!! アユミンはアタシの!!」

命音よ、いつ僕がお前のモノになった!

「ふざけんな！ 歩夢はオレのだ！！」

お前は引つ込め！！ キモイ！！ 鳥肌立っただろぅが！！

「フン、君達二人には勿体ない。他を探す事をおススメしよう」

村田氏よ、二人を煽ってどうする・・・。

三人がギャイギャイ言い争う中、稔はといえばやはりお茶を片手に傍観中。何か稔がお年寄りに見えてきたのは気のせいですか。

「お兄ちゃん」

梨花ちゃんが小さな手で手招き。その動作が可愛くてつい微笑ましくなりながら近付くと。

チユ

唇にキスされました・・・。

『あゝ！！』

叫びたいのはこっちだよ！ と言いたくなるほど叫びまくる三人。

「この・・・っ、いくら八歳児で可愛いからって、やり過ぎなんだよー」

「アユミンのファーストキスがぁ・・・」

「梨花、そういう事はもう少し大きくなってからしなさい」

・・・帰っていいですか？

本気で泣けてくる僕でした。ってか命音、ファーストキスだって何故知ってる。

超能力消失とキスと・・・(後書き)

あれ？ これってハーレムですか？
（ ・ ・ ）
メモメモ

エピソード(前書き)

とうとうエピソード!!

・・・早くね? とか言った人、前に出てください、土下座します

(笑)

すいません>|_|<

一応番外編などが続く予定ですが、かなり遅くなると思います(ホントダメダメです・・・)orz

エピローグ

『ホラ！ そっち行つたわよ！』

『うるせー！ 言われなくても分かつてんだよ！』

『二人とも、口を動かすより手を動かしてください』

耳に嵌め込む形の無線機から聞こえてくるのは、三人のいつものやり取り。ほぼ挨拶みたいになっているので、誰も気にしない。

「みんな相変わらず元気だなあ」

俺は苦笑交じりに呟く。

あれから五年。もうすぐ二十歳になる俺は、みんなのリーダーとして指示を出していた。

黒いコートに黒いズボン。黒髪黒眼の黒づくめ。その姿は夢で見た未来の俺にそっくりそのまま。

今いる場所はとあるビルの屋上。逃げる超能力者の男を追って、命音が音を飛ばし、強司が身体強化で追い詰め、稔がフォロー。それを上から見下ろして三人を誘導しているのだ。双眼鏡などなくとも能力を使えば良く見える。視力を良くすれば一発だ。

『捕まえた〜！』

命音と強司の楽しそうな声が聞こえてくる。

俺はふわりと身体を浮かせ、三人がいる場所へと飛んだ。

「お疲れ」

「ホントよ〜！ こいつ逃げ足だけは速いんだからサ！」

「お前が遅いだけだろ」

「何ですつてえ〜！」

二人の言い合いは華麗にスルー。

俺は男を念力で抑え込んでいる稔に目配せをした。途端に念力が解け、男の身体が自由になる。そのまま逃げようとしたところで、俺は持っていた縄を男に向けて放り投げた。イメージしたのは意思がある蛇。縄は男をグルグル縛り、バランスが崩れた男はドサリと倒れた。

「任務完了だ。とつとと連れて行こう」

終わりを告げると、ピタリと言い合いを止める命音と強司。この辺、仲良い二人だと思うのだが、二人は強く否定する。

そろそろ周りに野次馬が集まりだし、警官も駆けてくる。

俺は警察手帳を取り出し、制服を着た警官（お巡りさんだ）に見せた。途端にビシツと音がしそうな勢いで敬礼する巡査。

「こいつは連れて行く。野次馬の方を頼むよ」

言いながら微笑めば、巡査は頬を赤くしながら「ハイッ！！」と元気よく答えてくれた。野次馬の方からほう・・・と感嘆の溜息まで聞こえたがスルーだ。

男を連れて秘密組織（いまだにこの名称・・・）に戻ると、村田

氏に報告。五年経っても何も変わってないように見える、化け物か？ って言いたくなるオツサンだ。

この後男には組織への協力が能力封印かを選ばせる。封印は、昔はサイキックリングをはめるだけだったが、今は俺の能力で消失させる事を言う。こんな力、持ちたくなかった！ って人の方が多いから、最近ほとんど封印ばっかだな。

「歩夢！」

結局男の能力は封印し、罪を償えとばかりに刑務所送りにした後戻ってきた俺を呼んだのは変人こと渡部篤郎。滅茶苦茶久しぶりに登場だな。

中学二年の時、こいつには全部打ち明けた。こいつなら俺を嫌う事はないだろうと思って。そしたら「俺も一緒に働きたい！！」って言いだしたんだ。ビックリだったぜ。別に超能力者ってワケじゃないから、普通に一般人として働きたい、つー事だったんだが・・・行動力は無駄にある奴だからな。まあそれなりに頑張ってるよ。聞き込みとか書類整理とかな。

後もう一人、全部打ち明けた人物がいる。それが・・・

「歩夢君」

中学だった時、学校一の美女の名を競ってた（俺はそんなつもりねーぞ）鈴原麗華だ。

あの襲われた事件をきっかけに、とても仲が良くなった俺達。だからすぐに能力について打ち明けたんだが。これまた麗華ちゃんも

変わってて、

「凄い！ もっと見たい！ あたしも一緒に働けばいつでも見られるよね！？」

と興奮しきりでした。

いや、俺の周りはホント変な人だらけだと再実感したヨ・・・。

麗華（ちなみに呼び捨てなのは部下になるんだからそう呼べと言われたからデス）はトトト・・・と俺の傍まで来ると、腕に腕を絡ませて胸を押しつけるようにギュッと抱き付いてきた。

「お帰りなさい」

「あ、ああ。ただいま」

麗華は五年も経って身体の方も成長し、胸が命音ぐらいあんじゃねーかと思えるほどになってマス。おまけにもともと美少女だったので、今ではすんげえ美人です。母さんとも張り合えるぞ、うん。

「あゝ！ 何してんのサ！」

そこへ割り込む命音。麗華が掴んでいる腕とは逆の腕に抱き付いてくる。アレだな、両手に花だな。感触超気持ち良い。ただ・・・

「あら命音サン。お仕事でお疲れでしょう？ さっさとお休みになられてはどうです？」

「ハン、アレぐらいで疲れるワケないでしょ。アンタこそ仕事があるんじゃないのサ。とっとと戻りなさいよ」

俺を間に火花を散らすのはやめてほしい……。思わず嘆息している。

「くら〜！」

今度は梨花ちゃんが登場デス。

「歩夢お兄ちゃんは私の旦那様なんだから！ 触っちゃ駄目！」

そう言いながら唯一空いている胴体へ抱き付く。

最近は梨花ちゃんも年相応に成長してきている。大きい目はそのままで、とても可愛い。

両手に花どころか、全身に花と言えるかもな。

動く事が出来ずに、ギヤイギヤ言い争っている三人を静観する。
ん？ 止めないのかって？ 無理に決まってるだろ。

『あなた（アユミン・お兄ちゃん）は黙ってて！』

と返されるのがオチですから。

「ホントモテモテだな、歩夢・・・」

後ろでボソリと呟いた篤郎に助けて光線（ただの視線）を放つが、あっさりスルーされた。後で覚エテロ。

「あ〜！ 何してんだよ！」

エピローグ（後書き）

読んでいただいた方々に感謝！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4786v/>

夢よ現実に

2011年8月26日12時10分発行